

42481

教科書文庫

4
810
42-1941
200030
2123

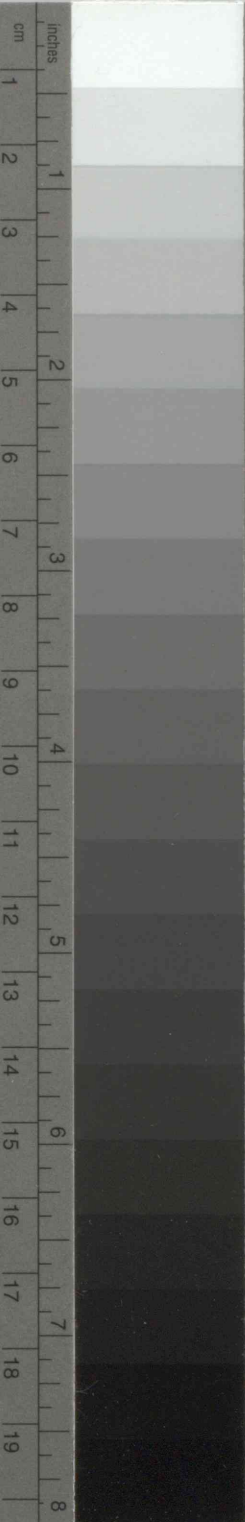
1941

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

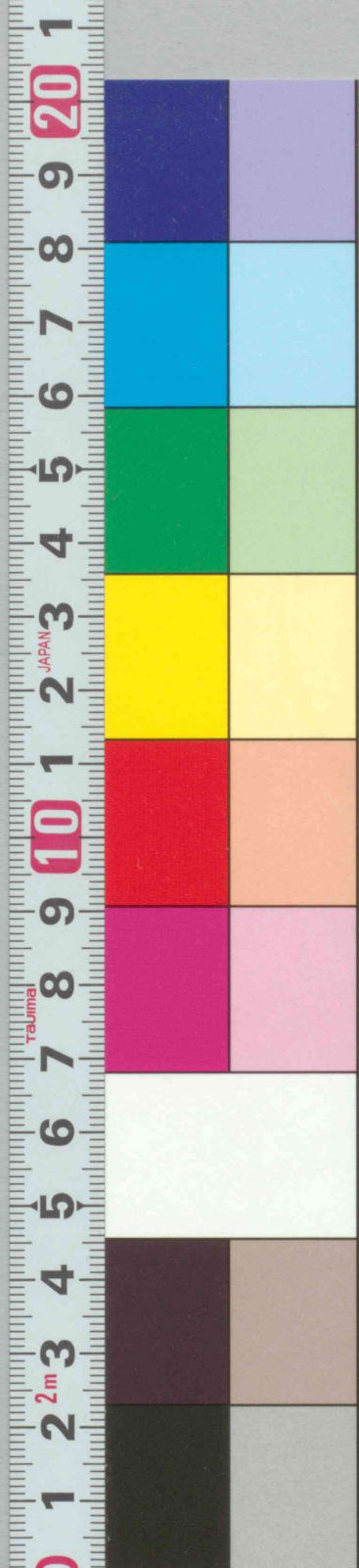
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



教科書文庫
4
810
42-1941
2000302123

女子新國語讀本

新刊版

卷二



教科書文庫
4
810
42-1941
2000302123

資料室

371.9

Om15

京都帝國大學
教授文學博士 澤瀉久孝
奈良女子高等
師範學校教授 木枝増一

共編

女子新國語讀本

新制版

修文館發兌

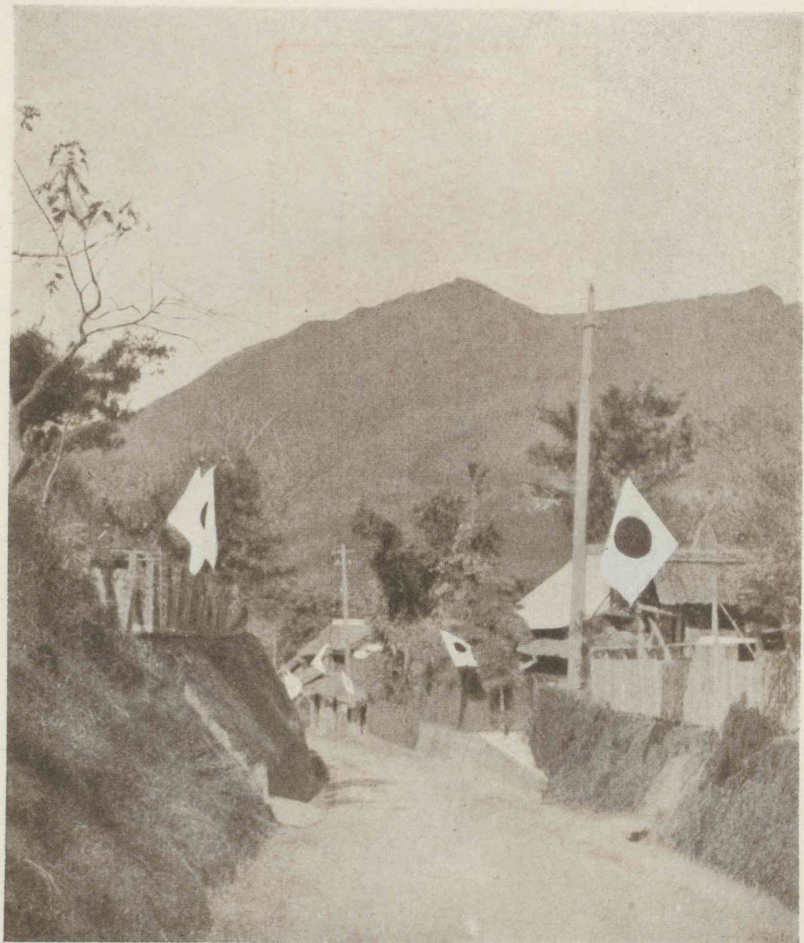
文部省檢定濟

昭和十六年七月三十日
高等女學校國語科用



広島大学図書

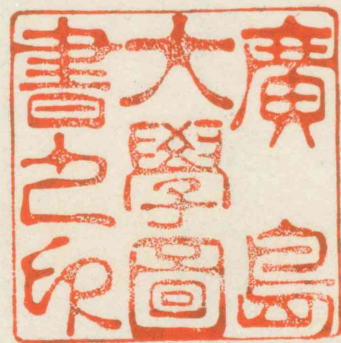
2000302123



(照參課二第)

日

祝



編纂の趣意

本書は、昭和十二年三月二十七日改正發布せられたる高等女學校國語科教授要目に則り、左の諸點に留意して編纂しました。

- 一 國民精神の體得——これに就いては、國體の精華、國民の美風、偉人の言行を敍し、特に日本女子としての特性を養ふに足る材料を選定しました。
- 二 文學精神の涵養——これに就いては、國文學の本質に基づき、時に於ては古今形に於ては様式の種々相に互り、心情を優雅ならしむべき材料を選定しました。
- 三 國語精神の把握——これに就いては、各教材が總べて醇正なる國語に採つてあるのは勿論、更に國語の正しい相を認識せしむると同時に、國語愛護の念を培ふに足る特別なる材料を選定しました。

右三點の外、世界の情勢を知らしめて圓滿なる國民的常識を養成するに足るもの、女子の本務たる家庭生活の趣味を向上せしめるに足るものをも加へました。

昭和十二年七月

木 枝 増 一
澤 瀉 久 孝

目次 卷二

一	日章旗の制定	木宮 泰彦	一
二	祝日の町	中西 悟堂	八
三	心眼・心耳	北原 白秋	二
四	な さ け	雲萍 雜志	三
五	和宮さま	女性美談叢書	六
六	師走日記	服部 躬治	四
七	形見の萬年筆	池田 宣政	四
八	句讀點	薄田 泣菫	三
九	山の歡喜	河井 醉茗	六
一〇	現代俳句抄	千葉 胤明	三
一一	歌御會始		

一三	甲冑堂	橋 南谿	六
一四	出陣	吉田 絃二郎	六
一五	夜話	二宮翁 夜話	六
一六	安壽と廚子王	森 鷗外	一〇
一七	董	小堀 杏奴	二八
一八	桃	島崎 藤村	三五
一九	年中行事の興趣	編者	三四
二〇	紋章	沼田 頼輔	一四
二一	國史に返れ	徳富 猪一郎	一五
二二	世界の日本	穂積 重遠	一三

附録

- 國語假名遣表
- 常用漢字表
- 略字表
- 國字表

……終……



女子新國語讀本 新制版 卷二

一日章旗の制定

木宮 泰彦

凡そ國旗は國家の標號であるから、その國の歴史を語り、その國の國體を表し、その國の國民精神の理想を示すものでなくてはならぬ。世界何れの國にも國旗の制のない國はないが、我が日章旗の様に鮮明にして純一、端正にして雄大なのはない。

併し、我が日章旗が國旗として制定されるまでには、

木宮泰彦
 静岡縣の人、歴史家、静岡高等學校教授、明治二十年(一五四七)生。
 標號

純正

曲折

水戸烈公

徳川齊昭、水戸の藩主、萬延元年三

五〇薨、年六十一。嘉永六年

浦賀

今、神奈川県浦賀町、横須賀市の東南約八軒

驚愕する事に與る禁を解く

有司
有(月)
評定衆

幾多の曲折があつたもので、それに就いても思ひ出されるのは、水戸烈公の功績である。

嘉永六年六月、米艦四隻が浦賀に來て交通を求めた



水戸烈公

時、我が國の上下は驚愕し、幕府は施すすべを知らず、水戸の烈公を起して事に與らしめた。その年の九月、幕府は烈公の議を用ひ、始めて大船建造の禁を解いた。一度大船建造の禁を解いたのであるから、各藩に於ても、大きな船が漸次建造せられ、中には蒸汽船さへ造るものもあつた。随つ

大目付・目付

徳川幕府の職名、非違を檢察し、これを君長に密告する監察官、老中に直屬して大名を監視する者を大目付、若年寄に直屬して旗本等を監視する者を單に目付といふ。

安政元年

孝明天皇の御代三五四



新田氏

源義家第二子義國の長男義重に出づ、徳川氏の先祖は義重の第四子義季である。

て、我が國に於ても、外國船と紛れない爲に國旗を制定して船印とする必要が起つた。當時是を國旗とは言はず、總船印と稱してゐた。そこで、幕府は有司に命を下し、意見を出させたが、評定衆は旭日を總船印となすべしと論じ、大目付、目付等は中黒を用ふべしと主張し、互に相譲らず、何等決する所がなく終つた。

翌安政元年五月、再び國旗制定の論が起つて、大目付、目付等は總船印には中黒を用ひ、幕府の旗には日の丸を用ふべしと主張した。當時烈公はこれに反對して、「中黒は新田の中黒など稱して、古來源氏の旗印であるのに、これを日本國の標號たる總船印に用ひ、日の丸を

顛倒する
當を得る
建議する
固執する
發令
公儀

以て幕府の旗印とするのは、大小輕重を顛倒したもので、當を得ぬ。苟も國家を代表して威を萬國に輝かす國旗は、日の丸でなくてはならぬ。幕府は中黒を印とすればよい。と論じて、その旨を幕府に建議した。けれども、大目付・目付等は前議を固執して動かない。そこで、烈公は七月一日再び建議案を出し、中黒を國旗とするの不可を論じ、日章旗の圖まで添へて意見を述べたので、幕府も遂に烈公の議を用ひ、衆議を排して、七月十一日次のやうな發令をした。

大船製造に就きては、異國船に紛れぬ様、日本總船印は白地日の丸幟相用候様被仰出候。且又、公儀御船

吹貫



廻米

萬延元年
孝明天皇の御代三
五〇。
新見正興
豊前守と稱した、
遣米使節、萬延元
年(五三〇)正月渡米
その乗船が咸臨丸
といふ幕府最初の
木製軍艦(約三〇
〇噸)であつた。
(次頁挿繪参照)

の儀は、白紺布交之吹貫帆中柱に相建、帆の儀は白地中黒に被仰出候條、諸家に於ても白地は不相用、遠方にても見分り候帆印、銘々勝手次第相用可申候。尤、帆印は其家の船印にても、豫て書出置候様可被致候。右大船之儀、平常廻米其外運送に相用ひ候儀、勝手次第に候へ共、出來の上は、乗組人數、並海路乗筋、運漕方等、猶取調可被相伺候。右之通可被相觸候。このやうに烈公の努力に依つて、我が國家の旗印は光榮ある日章旗と定まつたのである。後數年を経て萬延元年、外國奉行新見正興等はアメリカ合衆國に使し、條約の批准交換を行つたが、この時

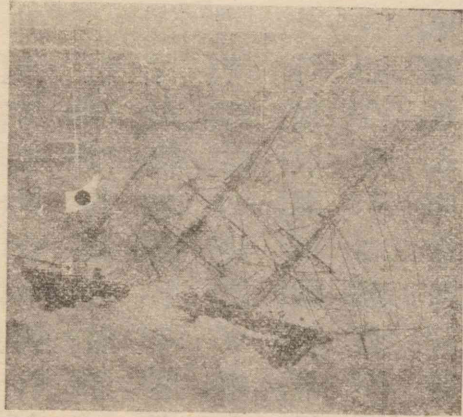
意匠

遠遼

晦冥

始めて堂々日章旗を翻して、かの國に行つたのである。かの國人はその壯烈な意匠を見て驚歎したといふ事

である。



成臨丸

國旗はかうして定まつたが、その紋章の由緒は甚だ遠遼である。畏くも皇祖の御名は、天照大神または大日靈貴と申し奉り、大神が一たび天の岩戸にお隠れ遊ばすと、天地が晦冥になつたといふのは、天日とその徳を等しく遊ばす事を物語るのである。随つて、天皇の御位を

小野妹子

第三十三代推古天皇に仕へ、同十五年(二云也)隋に使した。

日出づる所の

このお言葉は隋の歴史に書残してある。

皓潔

おもしろい日本歴史の話

木宮泰彦著、國史上興味ある題材を平易に説いたもの。大正九年(二五)十月刊行。

天つ日嗣と申し上げ、皇太子を日嗣の御子と申し奉つてゐる。聖徳太子が小野妹子を隋にお遣はし遊ばした時の國書には、日出づる所の天子、書を日没する所の天子に致す。「東天皇敬みて西皇帝に白す。」とのお言葉があつた。我が國はアジヤの東方に位し、日出づる所の國である。旭日の輝々たる光は熱烈活動の様を示し、その眞紅の色は皓潔至誠の情を顯してゐる。我が日本の標號とするのに日章を措いて他に何があらう。

(「おもしろい日本歴史の話」に據る)

口繪参照

中西悟堂

金澤市の人、詩人、
明治二十八年(三五)
丑生。

二祝日の町

中西悟堂

秋日あきじつの朝の町を私はゆく、

日章旗のひるがへる町を、

晴々しい祝日の町を、

私は心爽にあるいてゆく。

日章旗の何といふ純潔さ、

何といふ明朝さ、

私は祝日の国旗の美しさに心奪はれて、

おほらかに町をあるく。

純潔さ

明朝さ

|| 中心になる

おほらかに

博大な

町並のうしろになびくあをぞら、

あをぞらにひるがへる日章旗、

何といふ博大な心を示し、

何といふ光明の心を表してゐるのであらう。

あゝ晴れやかに麗しく、

日章旗は町にひるがへる、

はた／＼と流れる朝風にひるがへる。

私は日章旗が語る心を始めて知り、

その光輝に心奪はれ、

その單純さ、正しさに心奪はれ、

燦然たる
現代日本詩選
北原白秋・三木露
風・川路柳虹共綱、
河井醉茗の五十回
の誕辰を祝ふため
に現代日本詩壇の
詞華を集めたも
の、大正十四年二
月、十一月刊行。

嬉々として、爽に、
朝の町をあるいてゆく。
光榮の旗よ、
譽の國旗よ、
あゝ、樹々のみどりと、あをぞらと、
明かるい人々らの顔々と、
燦然たる日章旗とに飾られた祝日の町を、
感動に溢れくして、
私は颯爽とあるいてゆく。

(現代日本詩選)

北原白秋

名は隆吉、福岡縣
の人、詩人、歌人、
明治十八年(三四)
生。

三 心 眼・心 耳

北 原 白 秋

昔の武藝者は霜のふる音にも目を覺したと云ふが、
それは、恐しいくらゐ張りつめた「心」そのもので感ずる
ので、單に耳だけで聽いてゐるのではない。身體全體
が耳になり、身體全體に満ちわたつた精神力そのもの
で感ずるのである。これくらゐ隙が無くなればしめ
たものだ。

併し、それにしても、初は矢張り耳からはひつてくる
のであるから、とにかく耳から鍛へ抜かないといふと、
それほど澄み入るわけにはゆかない。

とにかく
鍛へ抜く

しめたもの

譬へば、醫者が病人の胸の上から指さきでとんとんと打つ。あれなども耳だけで音ばかりを聴いてるわけではない。そこは熟練で、音を聴くといふより直覺である。指さきがその場合耳になつてゐる。身體全體が耳になつてゐる。心が耳になつてゐる。

もつときはどい話になると、よく太刀風三寸にして身を交すといふ。眞つ暗がりて、後からさつと來る。はつと思つた瞬間に、名人ならばひよいと交す。これは耳で識るのではない、身體全體の直覺ではつと悟るのである。そこまでゆくと全く身體は鍛へ抜いてある。それがなかくの事であつて、生半可の修業者に

きはどい
太刀風

生半可

宮本二天玄心

名は無三四、二天

一流兵法の元祖、

正保二年(1645)歿、

年六十四

小倉

福岡縣

佐々木岸流

江戸初期の劍客、

小倉藩主細川忠興

に仕へた、慶長十

七年(1602)歿

機縁

筑後の柳河

福岡縣山門郡柳河

町



寸心
願時
精根

は滅多にできる話ではない。

武藝の話ではよく聞く事であるが、宮本二天玄心と小倉の離れ小島で眞劍の試合あれは敵討ではないさうである。をして斃れた佐々木岸流得意の一手は、燕返しの術といふのださうな。その燕返しの術を編み出した機縁が面白い。

岸流が諸國を遍歴して筑後の柳河に來た。何か自分獨得の一手を編み出したといふ心願で、何につけても心をくばる武藝修業の事であるから、寸時の油斷もない。今はほとほと精根を疲らしてしまつて、とある河邊の柳のほとりに、ぐつたりと腰を掛けてゐた。

羽風を切る

柳河といふところは私の故郷であるが、その名の通り柳が随分と多い。空は青々と晴渡つてゐたが、非常に風の吹く日で、どの柳もどの枝も非常に揺れる。と、その揺れに揺れてゐる柳の枝へ、燕が矢のやうに羽風を切つて飛んで来るかと思ふと、ぴたりと留つて、枝といつしよに揺れてゐる。又一羽来る。よくよく観ると燕は鋭い。燕は風の相間を狙つて、柳が揺れに揺れてほんの一寸静まる刹那、すなはち、動から静に移るその瞬間に、翼を返してぴたりと留るのである。どんな激しい風にも、相間はある。それは人間が息を吐くのとおんなじだ。それを燕は、翼や身體や眼や耳やで十分

靈覺

早業
氣合
膝をうつ

葛飾

東京市の東方郊外
一帯の地。

三谷

今、永吉・立木・猿袋等と相合はせて
鶴枝村と改める。

日がな一日
つれづれな
端座する

に知盡くしてゐる。直覺といふよりも、寧ろ靈覺と言つていゝくらゐの早業である。その燕の氣合や形で、こゝだと膝をうつた岸流はえらいものである。

これは私自身の話である。

葛飾かつしかは三谷の紫煙草舎にゐた時のことであるが、丁度五月雨の頃で、しとくと雨は朝から晩まで、日がな一日降りそゝいでゐた。つれづれな餘りに、靜かに机の前に端坐して、その雨の音を聽いてゐると、初はただ雨の音だと聽いてゐただけであつたが、しだいに心が澄んで來ると、それがいろ／＼な雨の音になつて來る。百日紅さるすべりの葉にふる雨、しだれ柳や松の葉にふる雨、古池

真菰



の面にふる雨、池のほとりの薪や真菰にふる雨、青い蜜柑の葉にふる雨、垣根の破れた葎簀にふる雨、屋根の萱や瓦にふる雨、朽ちた庇から滴る雨垂、または樋を傳つて落ちる雨水の音、庭石や地面や、濕つた苔の間に沁みこむ雨、さういふのが一つ／＼に違つた音を立ててゐる。それがいつしよに音を立てる。

その中からである。私は松の葉にふる雨の音ばかりを聴きわける事ができるかどうかを試して見た。なか／＼である。毎日坐つて聴惚れてゐるうちに、それが不思議にも、しだいにわかるやうになつて來た。さうして、幾日かの後には、愈松の葉にふる雨の音ばか

聴惚れる

澄みに澄む

心 心
眼 耳
極 致

極 意
流石に

りが、しんみりと、澄みに澄んだ耳にはひつて來た。これなども耳からはひつて心に達したのである。

身體を鍛へるといふ事も、つまりは心を磨きあげることである。つまりは心である。俗に心眼とか心耳とかいふものも、この鍛へあげた極致のはたらきをいつたものである。

藝道の極意に達したほどの名人は、流石にみんな違つてゐる。話が耳のことばかりになるが、序だから心耳といふものがどういふものか、一つ二つ話したい。私の郷里に大さんといふ盲人の琴の師匠がある。琴にかけては永年の修業で、今は全く名手といつてい

荒壁

惚々と

い。その盲人は、いつも粗末な荒壁のまゝの床の上に、圓胴の小さな太鼓をたつた一つ置いて、それを背後に、いつも惚々と坐つてゐる。太鼓の音に聴入つてゐるのである。心の耳が澄んで來ると、叩かぬ太鼓の音までも聞えて來るといふのである。

三味

喜多流

能樂の流派の一、江戸時代の初、喜多七太夫の創めたもの。

そこまで達した大さんは實にえらい。これは一つには、琴の方で、音といふ音を聴くことに修練しぬいたお蔭である。三味にはひつてゐる。もう一つのお話は、九州の喜多流の謠曲の名家で、大友枝翁(今の友枝さんの先代)のことである。ある時、その流の大家達ばかりが集つて、お能の催が

納める

おしまひ

をかしい

金聲

あつた。能といへば太鼓・小鼓・大鼓・笛・地謠・シテ・ワキ・ツレとかう揃つたところで、その一番が成立つものであるが、さて取りかゝつて納めるまではかなりの時間がある。この時のはかなりりの長ものだつたといふが、いよくおしまひになつて、囃子も舞もいよく納めてしまつたところで、どうしたものか、地謠の方だけが一文字だけあまつた。これはをかしいと思つて、みんながみんな寄集つて考へて見たが、どうにもさうなる原因が分からない。すると翁は、金聲のことであるから、傍でじつと觀てゐただけであるが、それはどこのどの拍子で、小鼓のどの手が一手落ちたからだと言ひきつ

たさうである。言はれて見ればまつたくさうに違ひない。そこで、流石の大家達も非常に驚いて、恐れ入つてしまつたと云ふことである。

これなども、眼で観てみただけでわかる筈はない。全く心耳で直覺したのである。靈で聽いて識つたのである。心を通じて耳で聽く、耳を通じて心で聽く、そこまで何かの道から鍛へあげ、磨き抜かなければ、犬や猫や蠻人に等しい。

私たちは詩歌の道から身體を磨き靈を磨き抜くのである。

(洗心雜話)

洗心雜話
北原白秋著、わかり易い言葉でわかり易いやうに書いた、詩歌についての雜話集、大正十年(天二)七月刊行

作文

座右

一小袖
一 襲

ひたぶるに

四 な さ け

一

予はいとけなき頃より詩歌の道を好み、偶、作文などせしをりから、稿なりて父に見するに、一つとしてほめられたる事なく、たゞ「無益の事なり」とて座右に投捨て置かれ、他の者のは見てほめさせ給へば、さりとはいかかとのみ思ひ過ししが、後に妻に迎へたる女の、もの縫ふ事の人にすぐれて、小袖など一日に一襲づつ縫ひて、餘事までも事缺かねば、もの縫ふ職人の見ては驚くばかりに上手なりけり。予或時もの縫ふをひたぶる

後る

水仕の業

に愛で賞しけるをり、妻の言ふ、「三歳にして母に後れ、繼母に育てられしが、いと厳しき性質にて、五六歳より水

仕の業をつとめ、七歳より手習、物

讀、裁ち縫を教へられ、實の子なら

ねば、教訓足らじと末に至りてそ

しられんは口惜し、とて、羽根つく

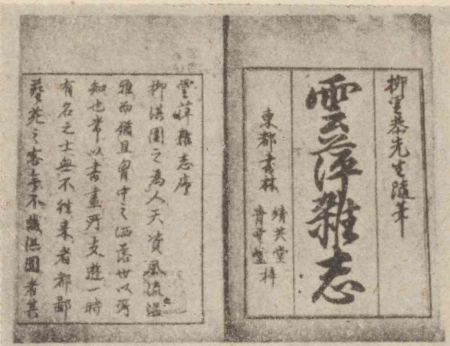
遊だにえせで、たゞもの縫ふ事の

みに違なかりつれば、をりからは

はげしき母よと思ひしかども、今

となりてはもの縫ふ事を人にほめらるゝは、ひとへに

繼母のなさけ薄からざる慈愛なり。」と言へるを聞きて、



志 雜 萍 雲

をりから

栽(木)

思ひ知らる

いや

かきほ

いはけなし

たのむ

をや

余がいとけなき頃の作文をほめられざるの、いとありがたきを思ひ合はせぬ。

二

朝顔を栽ゑたる日より芽さすを待つは、子を育つる

親の心もかくやとばかり思ひ知らる。二葉よりいや

葉生ひ出で、いと細やかなる蔓のかきほに取著くさま

は、いはけなき兒のものをたのめて立初むるに似たり。

蔓稍肥え、葉いよゝ茂りて、この蔓かの蔓にそひ、かの蔓

この蔓を巻きて、争ふが如く、競ふが如きは、道にまどへ

る者を案内するさまあり。或は登らんとする者の手

をとりて引上ぐるさまなど、繪にも巧めるものをや。

おのがじしに

東雲

花はその日くくに色變へて、おのがじしに染めなして、
 夙に起きて勤むるを勸むるに異ならず。東雲の空明
 けゆく程、露を含みたるがそよ吹く風にもまれて、重げ
 に置きあへずふりこぼせば、此方の花の、その露を受け
 てしづくももらさざる、すべて君臣相いつくしみ、父子
 相隣み、夫婦相睦び、兄弟相助け、朋友相親しむにひとし。
 人の世にあるもこの花の如く、その日くくを營みなば、
 盛もいと長く久しからむと、まだきに起き出で、東雲の
 曙をなぐさみ侍りぬ。

三

木曾の山中など深山幽谷にて岩茸を採るには、ふご

ふご(番)

まだきに

舟もやひ

得さく

惻隱の心

といふ物を造りて、綱を附けて、夫はそれに入りて、その
 妻樹々の枝より下げて、釣りおろし引上げなどして谷
 間のを採るとぞ。下は幾丈とも限り知れざる所なる
 由、見し人物語り。若し過ちて綱の切れて落ちたら
 んには、命なかるべし。また伊勢の浦にて海士のあは
 び採るには、乳呑兒など引連れて、夫はかいを使ひも
 て舟もやひするに、妻は海底に飛入り、此所彼所貝をも
 とむるうちに、兒の乳を尋ねてよくと泣く聲の水底に
 聞ゆるにぞ、今一つ得まく思へど、兒の泣く聲の聞ゆる
 にひかされ、浮かび出で、舟べりに取付き、息もつきあへ
 ず、兒に乳を添ふる有様あはれにして、實に惻隱の心も

すぎはひ

起りぬべし。

世渡る業さまゞなる中にかゝるすぎはひするや
からもあるものを家においてその日を樂に過しつる
身は、いとありがたき事にあらずや。

四

伏見より年七十歳ばかりなる老翁、土偶人土器のた
ぐひを擔ひて、洛中を售りありくあり。常に商ふ家に
來りて食事をするをりから、その家の奉公人大勢集り、
かの翁に言ひけるは、「御身の擔ひたるものは、その價い
か程ばかりの品にや。」と問へば、翁答へて、「銀十五六匁程
の荷なるべし。」と言ふ。また問ふ、「京の町は人のゆきか



伏見
今京都市伏見區。
土偶人
售(口)
ありく

銀

碎くまじ

なじる
無 心

雲萍雜志

四卷、柳澤淇園の
著した隨筆とい
ふ、天保十四年三
月刊行。

柳澤淇園

名は里恭、郡山(奈
良縣)藩の重臣、儒
者、寶曆八年(一四一
△)歿、年五十三。

ひ繁き所にて、若し過ちて皆碎くまじきものにもあら
ず。さやうの時にはいかゞするや。」と言へば、「それこそ
過なれば、さる事なしとは言ふべからず。さあらん時
はその事をありのまゝに述べて、我等も年久しく商ふ
なれば、一荷くらゐは情にて借受けて商ひ申すなり。」と
言ふ。また問ふ、「その上にもまた碎くまじきものにあ
らず。その時はまたいかゞするや。」となじり言へば、「い
かに問屋なりとて、數度の無心も言ひがたければ、その
をりこそ其の許たちの如く、奉公なりともいたすより
外にせんかたなし。」と言へり。

(雲萍雜志)

和宮

仁孝天皇の第八皇女、孝明天皇の御妹、御名は親子内親王、十四代將軍徳川家茂に御降嫁遊ばされた、後に靜寛院宮と申上げらる、明治十年（三五）薨、御年三十二。

將軍

徳川家茂

江戸芝濱にあつた、江戸時代に於ける紀州徳川家濱松町の邸、明治九年宮内省の所轄となり、濱離宮と稱してゐる。

天璋院夫人
家茂の養母。

五和宮さま

春暖い日でありました。庭には櫻の花が今を盛と咲亂れてをりました。

將軍は、濱御殿で和宮様と天璋院夫人と睦まじく物語をしてをられました。が、ふと庭の櫻が見たい。と言はれました。「それ、お草履を。」とお側の者から直ちにいひ渡されました。

静々と縁に出られた將軍は、草履をはかうとして下を見られましたが、その途端、將軍の顔色がさつと變りました。



(筆夫忠村吉)

宮院寛静

それは、どうしたものか沓脱の上には、和宮様と天璋院夫人の草履だけがあげてあつて、將軍の草履は下に置いてあつたのでありました。

お側の者がはつと氣がついた時には、もう間に合ひませんでした。天璋院夫人はもう先に下りてしまはれたのでした。と、それと見られた和宮様は、つゞいてほんと飛んでお下りになると、御自分の草履を取りのぞき、將軍の草履を沓脱の上に直して丁寧に頭を下げられました。

將軍の顔色はすぐに和ぎました。さうして、和宮様と連立つて、花に楽しみ、語らひに興じながら、そちこち

とお庭を廻つて歩かれました。
「どうなることか。」と心配してはらく／＼してゐたお側の者達は、ほつと胸を撫でおろしました。草履をその儘にして置いたなら、どんなにお叱りを受けるか分からないのでありました。

「お優しい御臺様。ほんたうに涙がこぼれるやうでございます。私達は何よりも早くお草履をお直ししなくてはならない筈ですのに、宮様ともあらう尊いお方様が、お手づからお草履をお直しなされます。勿體ないことでございます。」

腰元達は、和宮様の優しい御心遣にみな感泣致しま

御臺様

腰元

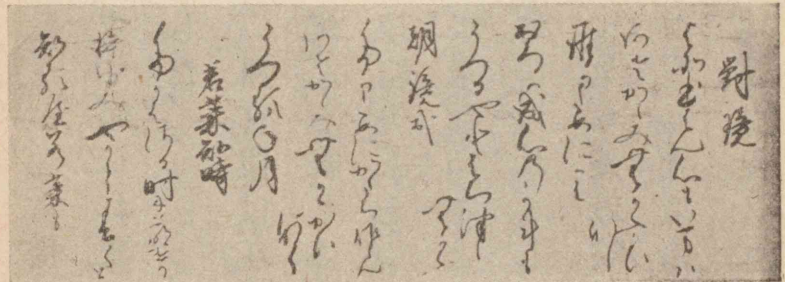
したが、和宮様は、妻としてそれは當然な務だ、としか思つて居られませんでしたから、何とも思はれませんでした。

和宮様は、江戸の生活にお馴れになるに連れて、だんだんと寂しさも薄らいで來ましたが、母上としての天璋院夫人との間が、心からしつくりと打解けることが出來ないことだけを、何となく物悲しくお思ひになつて居られました。

尤も、天璋院夫人は、世間によくある様な、嫁に辛く當つたり、意地の悪い仕向けをしたりするやうな事はなさいませんでした。が、何分宮様であると言ふ事から、嫁

生母

對鏡
よそほはん心もい
まはあさかみむ
かふかひなし誰か
ためにかは
おろか成心のかげ
もうつるやとはち
つゝむかふ朝鏡哉
たかためにかたち
作らんあさかみ
むかふかひなく
つる年月
若菜知時
たかはさる時に萌
けり梓ゆみやがて
春くと知るや若菜



和宮さま御筆蹟

ではありましたが、宮様に對して遠慮をなさり勝ちなのでありました。和宮様とても、將軍の生母ではなくとも、將軍の親に當る天璋院夫人は、當然また宮様にも親に當るわけでありましたので、それだけにまた一種特別な遠慮もありました。お互に遠慮をなさり合ふものですから、何となく心の中では物足りない様な氣がするのでありました。それが、宮様を物悲しく思はせるので

ありました。

幾日、幾月かの物寂しい日は續きました。さうして、其のうち暑に暑い夏がまわりました。

江戸の夏は焼ける様な暑さに照返りました。人々は蟬の羽の様な薄物を著てもまだく溜らなさうに、白扇をはたくと氣忙しく使ふのでありました。手拭を折つて頭に載せて道を歩く町人も、扇を鬚の上に翳して道の真中を行く侍も、日傘に顔を覆うてゆく美しい娘達も、みな玉の汗を流して行くのでありました。それでも江戸の町は、往き交ふ人々に賑はふのでありました。

翳す
(羽)

やがて其の夏も終らうとする或日のことでありました。

和宮様は天璋院夫人と御一緒に、勝安芳キチヤウホウの邸へ遊びにゆかれました。丁度晝時になつた頃、勝邸ではお食事を差上げました。すると、お給仕に伺つた女中が徒たてならぬ様子で安芳の許へ飛んでまゐりました。

「大變でございます。」

「騒々しい。何事ぢや。」

「はい、あのう、お二方様が御食事をお取りになりませぬので……。」

「それはまたどうした譯ぢや。」

勝安芳
舊徳川幕府の重臣、明治維新に朝廷と幕府との間に立つて善處した、伯爵、明治三十二年（五十九歳）年七十七。
徒ならぬ

「はい、御雙方で御遠慮を遊ばされて、お二方ともお箸をお先にお取りにならないのでございます。如何致しましたら宜しうございませう。」

「さやうか。よろしく。私が今伺つて見よう。」

安芳は、お二人のお座敷へ参りました。

「あなた様方は、どうなされたと言ふのでござりまする。」

「私がお給仕申しあげる筈です。それなのにあなた様からなさらうと遊ばしますから。」

「いゝえ、私からお給仕させて頂くが當然。それにそちら様からなさらうとなさいますので……。」

ござりまする

謙
る

かう言つて、お二人が互に謙つた御心からお給仕の先手を争つて居られるのでありました。

「さ様でござりまするか。それならば良いことがござります。これよ、お櫃をもう一つ出しなさい。」

安芳はかう言つて家人に言附けました。

お櫃が二つ持出されました。安芳はお櫃を一つづつお二人の側に置いて、「さあ天璋院様のお給仕は和宮様がなさりませ。和宮様のお給仕は天璋院様がなさりませ。これで、お喧嘩はござりますまい。」と申し上げました。

「安芳は利口者ですね。ほゝゝゝ。」天璋院夫人が先

づお笑ひになりました。

「ほゝゝゝ。」和宮様も朗にお笑ひになりました。

「お褒めを蒙りまして有難き仕合せ。はゝゝゝ。」安芳も心地よげに笑ひました。

笑の後には、やがて御仲睦まじい食事が開かれました。さうして、心から打解けたお物語が續けられました。

「おゝ、餘り遅くなりませぬうちに歸館致しませう。」ふと斜に傾いた庭の日射を見て、天璋院夫人が和宮様を顧みられました。長い夏の日も、はや梧桐の蔭に薄い光を投げてゐるのでした。

「ほんたうに何時の間にやら日射も薄らいでまゐりましたこと。」

和宮様は梧桐の葉蔭を見やつて、かうお應へになりました。 蝸ひくろしが胸せまる聲に鳴いてゐました。

「お立ちでござりまするか。 何のお饗應もてなも致しませぬ恐れ入りました。」

「いゝえ、大變に御馳走になりました。 有難う思ひます。」

安芳は、慇懃に玄關までお見送り申し上げました。

「これ、お馬車の用意を。」

と命ずる安芳の聲に應じて、お伴のお馬車が玄關近く

に寄せられました。

天璋院夫人が先づ一臺の馬車にお乗りになりました。 續いて和宮様も、別の馬車の方へお進みになりました。

「あゝ、こちらへ御一緒にお乗りなさい。」と天璋院夫人が聲をかけられました。 振返られた和宮様は、天璋院夫人とお顔を見合はせてにつこと微笑ほほえされました。 さうして、

「有難うございます。 では御免遊ばしませ。」と言ひつつ引返して同じお馬車にお乗りになりました。

「お大切に。」と謹んでお送り申し上げる安芳の聲をあ

移り香

とにして、びしりと空を打つ革鞭の音に、馬車は緩に動き出しました。さうして、玄關外に敷きつめられた綺麗な小砂利の上を軋りながら、薫り高い移り香を残して、軽やかに勝郎を出ました。

嗜深い

馬車の中では、途々も猶お睦まじいお物語が續けられてゐると見えて、「ほゝゝ」といふ華やかな、しかし、嗜深い笑ひ聲が、時折そとまで洩れ聞えるのでした。

夕を流れる涼風が打解けたお二人の御仲らひを喜ぶやうに、なごやかに吹渡るのでありました。

(女性美談叢書)

服部躬治

福島縣の人、歌人、大正十四年(二五八五)歿、年五十一。

六師走日記

服部

躬治

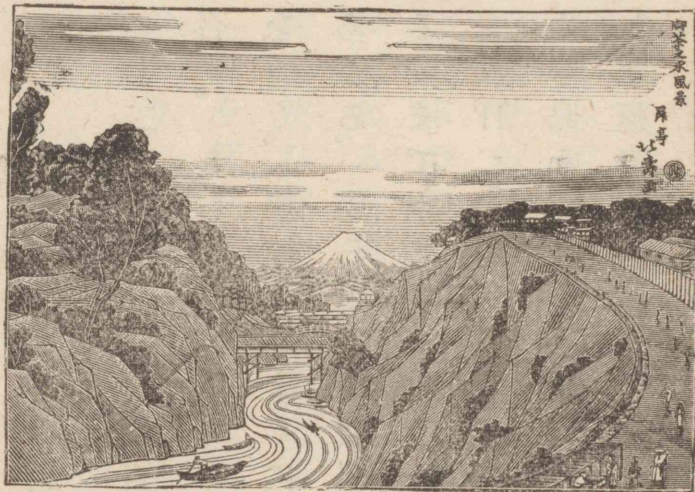
上野

東京市下谷區、もと寛永寺の境内、明治六年(一五三三)公關となつた。

十二月七日 水曜 朝晴れて寒し。父上お胴著を召す。えらがりの眞ちやんまでも、今日は流石に足袋を履く。學校よりすぐに琴のお稽古に廻る。「葵の上」あがる。歸る頃に風吹出し、だんくひどくなりて、暮るゝまで止まず。夜、上野の鐘さえて聞ゆ。

八日 木曜 飛石に薄霜置き、南天の枝に見も知らぬ小鳥あたり。冬牡丹一つ咲く。西澤さんに拜借せし「北極奇聞」を返す。夕焼の空に、七八日ぶりの富士山鮮に見ゆ、風呂場よりも、二階よりも。

肘(肉)



(筆壽北) 山士富るた見りよ水の茶お

九日 金曜 風寒し。
 手水鉢に薄き氷見ゆ。
 今日始めて襟卷す。兄
 様に肘突頼まる。母上
 に端切もらつて、序に自
 分のも一つ縫ふ。眞ち
 やん少し風ひく。わざ
 と髪を刈來て、もうなほ
 つた、なほつた。」と言ひ言
 ひ、一人にてなほりしに
 してしまひぬ。

歳暮
 歳(止)
 何時になし

十日 土曜 朝曇を氣遣ひながら學校へ行く。二
 時間目に風、三時間目より雨。神戸の姉様より小包に
 てお歳暮届く。何時になく早し。返事母上に代りて
 書く。

小包只今、をりからの雨の中に到着いたし候。風は
 寒けれども、御心入の暖なるお祝物、誠に嬉しく存じ
 候。御主人へよろしく、こなたよりはまた改めて。

匆々

匆々

あわたし

うつかりと我が名を書きて、出したる後にて氣が付き
 たり。「御主人へ宜しく」は、どう考へてもをかし。雨、風
 を帯びて、日暮るゝ事あわたし。

抵 概 低
反 古
反(又)

ストーブ
「暖爐」の意、英語。
空風めく

紙 鳶

十一日 日曜 曇。母上春著の見積し給ふ。お手傳して、洗物、張物などの部分けをなす。疊屋に催促の使を出す。午後、文庫の中を片附く。大抵は反古なり。役に立ちさうなる物は、ほんの少しばかり。何となく心細し。

十二日 月曜 冷えくと空晴れたり。霜柱立つ。父上のお書齋に石油ストーブ据附く。夕方微震。

十三日 火曜 疊がへ。空風めきて、日かげ照り曇る。夜、父上の靴下編む。

十四日 水曜 晴れて暖なり。髪洗ふ。庭松の梢に、どこの兒の紙鳶か引掛りて、夕近くまで離れず。兄

日本橋
東京市日本橋區。
曆(日)

山茶花



落 水
獻 立
獻 犬

様やつとの思ひして取らる。町田の叔父様より、御旅行にお立ちの由葉書來る。冬牡丹また一つ咲きたり。十五日 木曜 晴。疊がへ終る。大工來て、あちらこちら繕ふ。母上の買物に日本橋へ行き、序に新曆を買ひて歸る。兄様と眞ちゃん、裏庭にて落葉を焚く。煙面白く立昇る。

十六日 金曜 今日も晴。學校より歸りて、洗物少しす。杉垣の向かふに隣の山茶花の花白く見えて、落水の音いと静かなり。母上重詰、お雑煮などの獻立し、帳面に書附け給ふ。「口取には是非梅花玉子を」と差出口して、ためしに今日料理してみる。自身が梅の花弁、

見る目美し

憎まれ口

吠え。

黄身が心と。少し大き過ぎ柔か過ぎたれど、見る目とにかく美しとて、母上に褒めらる。「お蔭で夕飯が遅くなつた」と、兄様例の憎まれ口に、却つて誰より多く召上る。

十七日 土曜 朝霜日に輝きて白し。うがひの水何時もより齒にしむ。少し後れて琴のお稽古に行く。先生もお風氣なり。夜、犬頻りに吠えておそろし。遠き半鐘聞ゆ。

十八日 日曜 寒けれど晴れ、心地よし。深井さんにお能見に誘はれたるをことわり、家にゐて、色々母上の御用を足す。父上にお客多く、目の廻る様にて夜になりぬ。

年玉

カメリヤ
「椿」の意、英語。

十九日 月曜 曇。雨少し降る。町田の叔父様、昨日歸京せられし由にて、お出でになる。お土産に米澤紬一反戴く。

二十日 火曜 晴れたる空に風高く吹きて、後れ渡る雁が音聞ゆ。母上お歳暮、お年玉の配り當し給ふ。側にゐて品數、家數など、おつしやる通りを勝手用の手帳に書附く。カメリヤのつぼみ、今日やつと破れかけたり。植鐵より梅の盆栽届く。下駄、手袋買ふ。來年の日記帳も買ふ。

(姉)

妹

池田宣政

東京府の人、著述家、明治二十六年(二五五)生。

七 形見の萬年筆

池田 宣政

トーマスクック會社

ロンドンに本店を有し、世界各国旅行者のために便利をはかる會社。

ベルリン
ドイツの首府。

ヨーロッパの大都會を短い時日の間に見物するに一番便利なのは、トーマスクック會社の見物乗合自動車を利用する事である。無蓋の四十人乗の大型自動車で、案内者が一人附いてゐる。非常な速力で、市内の名所から名所を走り廻つて、案内者が英語、獨語、佛語で説明してくれるのである。
ベルリンに著いた翌日、私はこの自動車の一席を占めて、各國の見物人と一緒に市中を見物したのであつた。

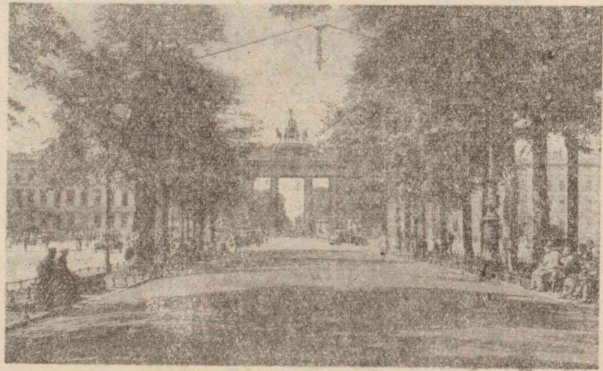
ウンテル・デン・リンデン

「菩提樹下」の意、菩提樹の植ゑられたるベルリンの大通り。

リンデン
菩提樹、科木のドイツ名、街路樹として用ひられる。

負けじ魂

車がウンテル・デン・リンデンの大街路に止つて、案内者が説明してゐた時の事である。リンデンの木蔭に遊んでゐたドイツ少年達は、外國人珍しさに自動車の周圍に駆けよつて來た。大戦後の事とて、少年達の服装は見苦しかつたが、その顔には男らしい負けじ魂が現れてゐた。淺黒い陽に焼けた顔色、人の心を刺し通すやうな鋭い瞳、きつと結んだ唇。さすがはドイツの少年



路街大のンデンリ・ンデ・ルテンウ

だなど私は彼等の様子に見惚れてゐた。すると、その中の十二三歳の一少年が私に近づいて来て、

「どうぞ、日本の御方。」

といひながら、小さな手帳を差出した。これまで各地を旅行する間に、少年達から署名を求められた事は度度あつたので、私はその手帳を受取つて、自分の万年筆で、

署名
(四・网)

「池田宣政、日本、東京。」

とわざと日本字で認めてやつた。すると、横あひから、フランスの若い男が、

「私も書きませう。」

と、いつて、笑ひながら、その手帳と私の万年筆を取つて署名した。

「私どもも書きませう。」

と、カナダから来た老夫婦も署名した。かうして汚れた手帳と、私の万年筆は乗合の笑聲の中に、彼方此方と人々の中を渡つていつた。私は、私の万年筆が諸外國人に使はれるのを、何となく嬉しく感じてゐた。といふのは、この万年筆は外遊の途に上るに當つて、親しい友が心を籠めて贈つてくれたもので、材料といひ、細工といひ、裝飾といひ、又、その使ひ心地といひ、實に申し分なく出来た日本品であつた。

いく(ゆく)

外遊

ふと氣がつくと、自動車は何時の間にか走り出してゐた。はつと思つて振返つて見ると、彼の少年はもう五十間ばかり後で、大聲に何か叫びながら、兩手を高く擧げて振つてゐる。その手に見える白いものは手帳であらう。けれども、萬年筆はどうしたのか。その行方を尋ねるのも失禮の至と思つて、そのままにしてしまつた。かうして愛用の萬年筆は失はれた。

偶然
つひぞ

それから三年は過去つた。或日偶然、つひぞ知らぬ外國婦人の手紙と、一封の小包郵便を、日本に歸つてから受取つた。不思議に思つて、小包を開くと、中から丁

毀(支)
歪(止)
陸な
失望する

寧に紙に包んだ萬年筆が現れた。「おや」と、夢かとはかり喜んだが、併し、鞘は散々に毀れ、ペンは歪んで陸な字は書けなくなつてゐた。私は愛兒が大怪我をして歸つて來たやうに、驚き、且、失望した。

失望しながらも、ともかくもと手紙の封を切つて見た。ドイツ文字で細かく書いた長々しい手紙であつたが、讀んで行く中に、覺えず私は臉の熱くなるのを感じた。ひとりでに涙が頬を傳うて來た。

翻譯する
翻一翻

文意をわかりやすく翻譯すると、かうであつた。

見も知らぬ私から、突然手紙を差上げて御不審にお思ひでせう。又、こんな下手なわかりにくい

文字でさぞ御迷惑でせう。

けれども、私は最愛の息子がこの世の息を引取る間際まで、氣に掛けてゐたあなたの萬年筆に就いて、是非申し上げねばなりません。

私は、あなたが三年前にウンテル・デン・リンデンの木蔭で、萬年筆を貸して下さつたカールと申す少年の母親です。

カールは死にました。そして、死ぬ時まであなたの萬年筆の事を心配してゐました。いゝえ、その萬年筆の爲に死んだやうなものです。

カールは私の末の息子でした。兄達は一人は

イギリスに、一人はオーストリアに働いてゐます。父親は大戦中、お國の爲にフランス國境で戦死を遂げましたので、母子二人で貧しく暮してゐました。

カールは良い子供でした。親切で孝行な子でした。學問も好きでした。私はどんなにあの子の行末を楽しみにしてゐた事でせう。そのカールは死にました。あゝ、最愛のカールは、あなたの萬年筆をお返ししようとして色々苦心して、三年後の今日、漸くあなたの住所を知る事が出来て、お返ししようとして外へ出た時、自動車に轢かれてしまつた

瞬間

のです。

けれども、カールは死の瞬間まで、本當のドイツ人らしく、正直で立派でした。

カールはあなたから萬年筆を借放しにした事を非常に残念がつてみました。あなたの自動車が急に走り出した時に、喫驚して後を追つたさうです。けれども、間に合はなかつたさうです。

家に歸つて、カールはその事ばかり心配してみました。「ドイツの少年は不正直だ。他人の物を横領したと日本人に思はれるのは、死ぬよりも恥辱だ。否、僕だけの恥ぢやない。ドイツの少年

横領する

恥辱

遇會遭逢

全體の恥だ。私はどうしてもあの日本人にこれを返さなければならぬ。といつて、毎日街へ出て、あなたに再び遇はうとしてみました。

容易にあなたに遇へませんでした。あなたの署名は日本字であつて、私共には讀めませんので、カールは街を通る日本人に讀んでもらひました。その日本人は手帳を見て、「これには唯日本東京とあるから住所はわからない。大使館で尋ねたらわかるかも知れない。」と教へましたので、カールは大使館を訪ねましたが、だめでした。

大使館から歸つて來たカールは、「あの池田とい

ふ日本の人は、僕の事を何といつてゐるだらう。いゝや、ドイツ人の事をどんなに悪く思つてゐるだらう。」といつて、口惜涙を流してゐました。あの子の性質としては無理もないと、私も一緒になつて残念がりました。

あなたの住所を見出す手段には、私もカールもまつたく困つてしまひました。ところが、どうでせう。カールはたうとうあなたの住所を探し出したのです。

或日、カールは狂犬の様にすさまじい勢で家へ飛込んで來ました。そして、「お母さん、わかりまし

海外の友協會
世界各國の少年の
通信交換をする會
で、本部はアメリ
カにある。

微笑

た、わかりました。」といつて泣いて喜びました。カールが熱心にあなたの住所を探してゐることは、學校でも、教會でも、お友達の間でも大評判で、親切な人達は一緒になつて探してゐてくれました。中でも一番熱心なヨハンといふお友達が、「ドイツの少年の名譽の爲に一緒に探す。」といつてゐましたが、この少年がたうとうあなたの住所を、海外の友協會の名簿中に發見したのでした。

早速私達は萬年筆の小包を造りました。そして、カールはヨハンと一緒に、小包を抱へて家を飛出しました。私は微笑を以てその後を見送りま

不吉な

したが、二人が戸口を出たかと思ふ時に、ピューと不吉な警笛が鳴りました。

暫くすると、どさく〜と階段を上る人々の重い足音がして、荒々しく戸を開いて二三人の大男が入つて來ました。私は一目見て「あつ」と後へ倒れました。人々に頭と足を支へられて、擔ぎ上げられて來たのは、二三分前に喜び勇んで、兎のやうに快活だつたカールなのでした。喜の餘りに向かふ見ずに街に飛び出した出會頭に、自動車に轢かれたのでした。私は床の上におろされたカールの身體に取りすがりました。青白い顔、眞紅な血、

向かふ見ずに
出會頭

白蠟

醫者の手當のかひもなく、カールは刻々白蠟のやうに青ざめて行きました。

「すみません、お母さん、ゆるして下さい。」さういつて、目を閉ぢましたが、又「萬年筆……小包……出して下さい……ドイツの少年の名譽……お母さん。これが彼の最後の言葉でした。

手紙の最後に、カールの心中をかはいさうと思ふなら、同封した寫眞の彼に冥福を祈り、あなたの寫眞と一緒に送り返してほしい、と書いてあつた。

かはいさう
冥福
輝く凱旋像
池田宣政著、二十四篇より成る少年少女のための短篇物語集、昭和六年（一九三二）九月刊行。

（輝く凱旋像）

薄田泣菫
 名は淳介、岡山縣
 の人、詩人、隨筆
 家、明治十年（三五）
 年生。
 合衆國
 アメリカ合衆國。

八句 讀點

薄田 泣菫

文章を書くものにとつて、句讀點ほど疎に出來ないものはない。合衆國政府はこの句讀點一つで二百萬弗損をしたことがある。

何時だつたか、同國の政府が、外國産の果樹をなるべくどつさり移植して、かうした果物の供給で餘り外國に金を拂ひたくないといふので、外國産の果樹輸入は無税にするといふ海關稅法を拵へたことがあつた。バナ、や蜜柑を廉く食はうといふには、こんな結構な規則は滅多に無かつたが、肝腎の法文を印刷する場合

廉—安—易
 食はう。
 肝腎
 肝(肉)
 法文

大手を振る

關稅

近松門左衛門

杉森信盛、號は巢
 林子、淨瑠璃作者、
 享保九年（三六四）歿、
 年七十二。
 昵懇

に、どう違つたものか、外國産の果樹、「オリンフルート」 「フオリンフルート」 「フオリンフルート」といふ言葉の中に句讀點が一つ挿まつて、「オリンフルート」 「オリンフルート」となつて、そのまゝ世間に公布せられてしまつた。さあ、外國産の果物が無税になつたといふので、蜜柑や葡萄やレモンやバナ、といふやうな果物が、大手を振つてどんく入つて來た。それと氣づいた政府が法文を訂正するまでに、關稅の收入がいつもよりざつと二百萬弗少くなつてゐたさうだ。

句讀點といへば、ある時、近松門左衛門の許に、かねて昵懇の數珠屋が尋ねて來た。その折、門左は鼻先に眼

江戶時代の眼鏡



數(支・友)
きいた風な事

癩に障る

ふたへ。

鏡をかけて、自作の淨瑠璃にせつせと句讀點を打つて
みた。數珠屋はそれを見ると、急にきいた風な事が言
つてみたくなつた。

「何かと思つたら句讀點ですか。そんなものは、漢文
には入るかも知れませんが、淨瑠璃には不用なことで
す。つまり暇潰しですな。」

門左はひどく癩に障つたらしかつたが、その折は唯
笑つて済ました。

それから二三日過ぎると、數珠屋あてに手紙を一本
持たせてやつた。數珠屋は封を切つてみた。手紙は
數珠の注文で、なかに「ふたへにまげてくびにかけるや

うなじゆず」といふ文句があつた。數珠屋は「二重に曲
げて、首に懸けるやうな」とは随分長い數珠を欲しが
るものだと思つたが、早速そんなのを一つ拵へて持た
せてやつた。すると、門左は注文書に違ふと言つて返
して來た。

數珠屋は蟹のやうに眞赤になつて、皺くちゃな注文
書を擱んで門左の許に出掛けた。門左はじろりとそ
れを見て言つた、「どこにそんな事が書いてあるな。『二
重に曲げ、手首に懸けるやうな』と、あるぢやないか。だ
からさ、淨瑠璃にも句讀點が入るといふのだよ。」

茶話
二冊 薄田泣菫著
隨筆集、上卷大正
十三年(二五六)三
月、下卷同年十月
刊行。

河井醉茗
名は又平、堺市の
人、詩人、明治七
年(三五四)生。

九山の歡喜

河井 醉茗



あらゆる山が歡んでゐる。
あらゆる山が語つてゐる。
あらゆる山が足ぶみして舞ふ、躍る。
あちら向く山と
こちら向く山と
合つたり、
離れたり、
出て來る山と
かくれる山と
低くなり、

疎い山とイ

醉茗詩集

河井醉茗著、一卷、
大正十一年(三五三)
までの詩を集む、
大正十二年一月刊
行。



高くなり、
家族のやうに親しい山と
他人のやうに疎い山と
遠くなり、
近くなり、
あらゆる山が
山の日に歡喜し、
山の愛に點頭うなづき、
今や
山のかがやきは
空いつばいに廣がつてゐる。

(醉茗詩集)

朝寒
大須賀乙字

名は續、福島縣の人、東京音楽學校教授、俳人、大正九年(二五八)歿、年四十。

河東碧梧桐

名は秉五郎、松山市の人、俳人、昭和十一年(二五九)歿、年六十五。

荻原井泉水

名は藤吉、東京市の人、俳人、明治十七年(二五四)生。

ひそと

佐々醒雪

名は政一、京都市の人、國文學者、東京高等師範學校教授、文學博士、大正六年(二五七)歿、年四十六。

ぬかり道

行年や誠を守る一心事

朝寒や日當る白に鶏の居る

干足袋の日向に凍る寒さかな

雛かざる朝の渚をあるき貝拾ふ

蚊帳に來た蟬の裾べに一鳴きす

家々の菊大方は黄菊海の照りかへす

大根を煮た夕飯の子供達の中にある

筆とる我にひそと炭つぐ母哀し

土筆に風やんでゐる日あたり

散り梅や蛇の目提げ行くぬかり道

山門の仁王に迫る若葉かな

同 大須賀乙字

同 河東碧梧桐

同 荻原井泉水

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

沼波瓊音

名は武夫、名古屋市の人、國文學者、俳人、第一高等學校教授、昭和二十二年(二五七)歿、年五十一。

藤井紫影

名は乙男、兵庫縣の人、國文學者、京都帝國大學名譽教授、文學博士、明治元年(二五八)生。

沙木

久保田万太郎

東京市の人、小説家、劇作家、俳人、明治二十二年(二五九)生。

夕時雨

芥川龍之介

俳號我鬼、東京市の人、小説家、昭和二年(二五六)歿、年三十六。

室生犀星

名は照道、金澤市の人、詩人、小説家、明治二十二年(二五九)生。

干菜

ほし傘に萩のこぼれてよき日なり

障子しめて秋の夜となる一間かな

汐木ひろふ浦の日和や冬の海

髪刈れば首筋につく餘寒かな

宵淺くふりいでし雨のさくらかな

ぬれそめて明かるき屋根や夕時雨

元日や手を洗ひをる夕ごゝろ

蝶の舌ゼンマイに似る暑さかな

隣間にいとどを捨つる夜半の秋

足袋と干菜とうつる障子かな

沼波瓊音

同

藤井紫影

同

久保田万太郎

同

芥川龍之介

同

室生犀星

同

今年の歌御會始は一月十九日

千葉胤明
宮内省御歌所寄
人、元治元年(三五二)
巳生。

二 歌御會始

千葉胤明

有事
遊ばす
もる

明治三十七年
紀元二五六四年
民草
うかゞはれる

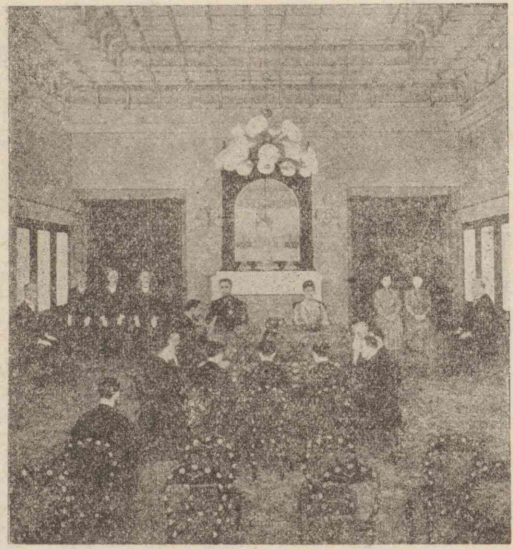
明治天皇に二十年御奉公申し上げて御製を拜誦する度につねに私が感激に堪へなかつたのは、敬神愛國愛民の御情の溢れてをることでありました。國家有事の際に遊ばされた御一例に就いて申しますと、こらは皆軍のにはいてはてて翁ひとり山田もるらむ

明治三十七年、戦争中の御製であります。この一首を拜しましても、陛下の民草を憐み給ふ大御心がうかがはれて、たゞ感激する外はないのであります。

開城
公報
津々浦々
壽ぐ

生々潑刺の氣

恒例



(畫壁館畫繪念記德聖) 始會御歌

忘れもいたしませぬ、明治三十八年一月一日、旅順開城の公報に接した國民は、津々浦々に至るまで、戦勝を壽ぎ、萬歳を叫んで祝杯をあげたのであります。其の爲に、その年の正月は、何となく生々潑刺の氣が、全國にみなぎつてをりました。かうした中に、御恒例による新年歌御會始の御式が、一月十九日に行はれ

寄人

龍額
龍(龍)

預選歌
披講

ました。御題は「新年山」と申すのでありまして、御式場は宮中の鳳凰間で、私ども寄人の席は、玉座近くに設けられてありましたので、二時間の長い間、畏れ多くも龍顔を仰ぎ奉るわけでありました。

参列の光榮に浴した人々は、それ〴〵定め席についておりました。やがて

兩陛下におかせられましたは、御機嫌うるはしく出御遊ばされました。

いよ〴〵詠進數萬の内から選ばれた預選歌の披講となりまして、式場は寂として聲なく、水を打つた様になつてをります。何れも預選者が何人で、その歌はど

欵(欠)

講師

軍國
誰しも

一刹那

ういふのであらうかと、耳を欵ててゐたのであります。その時、講師の讀上げる聲が朗に、この静けさを破つて響きました。

「山梨縣陸軍歩兵二等卒妻、大須賀松枝。」
意外の預選者なので、一同ははつと胸を躍らせました。

軍國の新年歌御會始にはふさはしいやうにも思はれるし、さりとは又珍しいことであると、誰しもが考へたらしいのも無理のないことでもあります。

陛下は、御式中は常に御微動だも遊ばされないのではありませんが、この一刹那御頭を少し御傾け遊ばされ、講

師の讀上げる預選歌を、じつと御聴き遊ばさうとなされる御様子でありました。

講師の聲は、靜かに續きました。

つはもの
背子

つはものに召しいだされしわが背子はいづこの山に年迎ふらむ

人も人なり、歌も歌なり、竝みゐるもの一同ぐつと胸を打たれたのであります。

陛下には、この時極めて御感深く聞し召された御様子に拜し奉りました。

咫尺
咫(口・六畫)

眼前咫尺の間に龍顔を仰ぎ、陛下のこの御様子を拜し奉つて、私どもは思はず熱い感涙のために眼をうる

取亂す

ほしたのであります。もし御式場でなかつたならば、私は取亂して泣いたに相違ありません。限りなく御仁慈にわたらせ給ふ陛下の大御心を拜察し参らせますと、今も猶眼底に涙の宿るを覺えるのであります。

あらたまの
あたらまし(五十一)

あらたまのとしたつ山をみる人のこゝろを歌にしるかな

この御製は、この歌御會始の終つた後、遊ばされたのであります。この御製の陰には、かうした一場のうるはしい物語が藏されてゐたのであります。

明治大帝
主として、明治天皇の側近に奉仕した人々の謹話を集め、明治の御代の偉人・傑士的美談を附載す、昭和二年(天正)十一月刊行。

(明治大帝)

橋南谿

本名は宮川春暉、伊勢國三重縣の人、醫者、文學者、文化二年(三四五)歿、年五十四

才川下

今の宮城縣刈田郡齊川

凶作

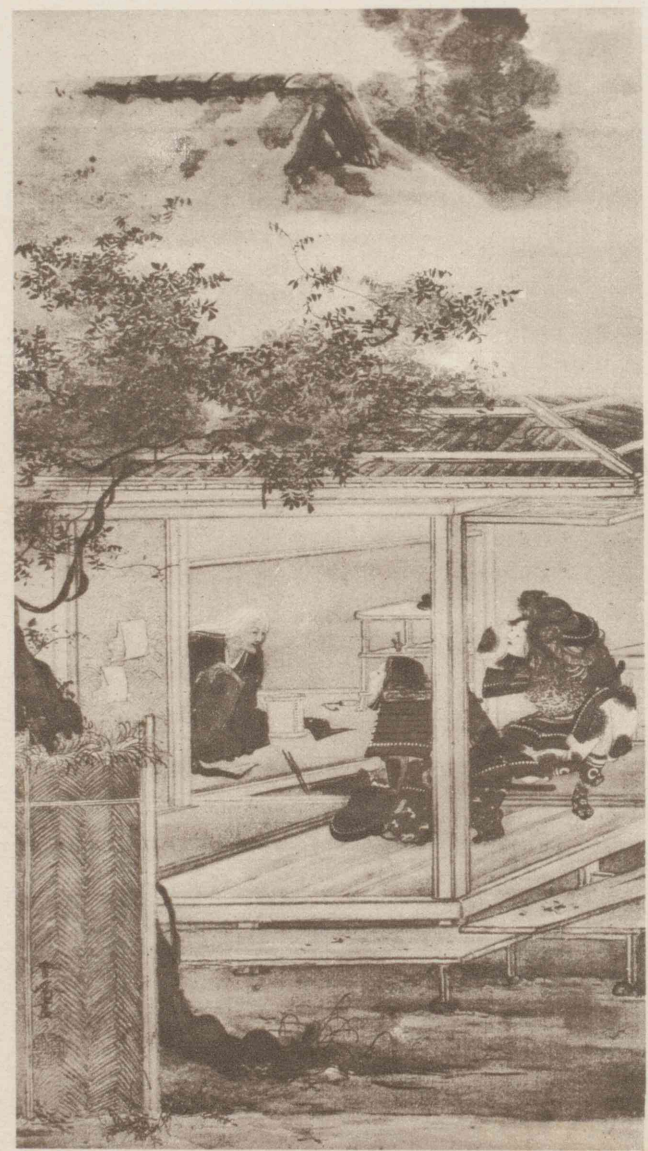


三甲胃堂

橋南谿

奥州白石の城下より一里半南に才川といふ驛あり。此の才川の町末に高福寺といふ寺あり。奥州筋近年の凶作に、此の寺も大破に及び、住持となりても食物乏しければ、僧も住せず、あき寺となり、本尊だに何方へとり納めしにや、寺には見えぬ。庭は草深く、誠に狐・梟のすみかといふもあまりあり。

此の寺中に又一つの小堂あり、俗に三甲胃堂といふ。堂の書付には故將堂とあり。大きき纔かに二間四方ばかりの小堂なり。本尊だに右の如くなれば、此の小



(筆崎香口谷) 二婦に姑を慰む

やうやう
安置す

佐藤繼信

佐藤元治の長子、

忠信の兄、義經の

家來。

忠信

佐藤忠信、佐藤元

治の子、義經の家

來。

鎌倉殿

源頼朝

義兵

藤原基衡の子、陸

奥國(岩手縣)平泉

に居り義經を庇護

した、文治三年(一

一〇七五)歿。

佐藤庄司

信夫庄司元治

一の谷

攝津國(兵庫縣)

屋島

讃岐國(香川縣)高

松市

堂の破損はいふまでもなし。やうく縁にあがり

見るに、内に佛とても無く、只婦人の甲冑して長刀ななを持

ちたる木像二つを安置せり。いかなる人の像にやと

尋ぬるに、佐藤繼信、忠信二人の妻の像なりとかや。

其の昔、義經、鎌倉殿の義兵をあげ給ふを聞き、秀衡に

暇乞して鎌倉へ赴き給ふ時、佐藤庄司、我が子の繼信、忠

信を御供に出せり。其の後、義經、京都へ攻上り、平家を

追落し、一の谷、屋島等にてさばかりの大功をたて給ひ

て、再度奥州へ來り給ひし時、初めつき従ひて出でたり

し、龜井、片岡など皆無事にて歸國せしに、繼信は屋島に

て能登殿の矢先にかゝり、忠信は京都にて義の爲に命

さばかり
龜井・片岡

龜井六郎重清、片岡八郎弘常、共に義經の家來て、文治五年二合を衣川の戦に死んだ。

能登殿

平教經、能登守であつた。
矢先にかゝる

凱陣す

凱(凡)

凱陣す
凱(凡)
凱陣す
凱(凡)
凱陣す
凱(凡)
凱陣す
凱(凡)
凱陣す
凱(凡)

鳴(口)

つれそふ

希代

希(巾)

を落し、兄弟二人とも他國の土となりて、形見のみかへりしを、母なる人かなしみ歎きて、無事に歸り來たる人を見るにつけて、せめては一人なりとも此の人々の如く歸りなば、など泣沈みぬるを、兄弟の妻女其の心根を推量し、我が夫の甲冑を著し、長刀を脇ばさみ、勇ましげに出で立ち、只今兄弟凱陣せしと、其の倂を學びて老母に見せ、其の心を慰めしとぞ。其の頃の人も、二人の婦人の孝心をあはれに思ひしにや、其の姿を木像にきざみて残し置きしとなり。

嗚呼、兄弟の人は、古今ためしすくなき忠義武勇の士なり。其の人につれそひし婦人亦希代の孝女にて、夫

そごろに

何ぞ

香華

香(香)

あはれ

参物

くはし

東遊記

正續各五卷、橋南齋著、天明四年(西暦一八一四年)戸に至り、東海、東山・北陸を遍歴して六年の夏歸京した間の奇事異聞を録した書、寛政七年(一七九五年)寛政九年(一八二七年)刊行。

婦忠孝の勝れしも世に珍しきことなり。余此の物語を聞き、此の像を拜するに、そごろに落涙せり。かくばかり人の鑑ともなるべき孝婦の像の、かくあはれはてたる小堂の、雨風をだに防ぎかねて、彩色も落失せ、僧だに守らで、香華を供する人も無く、年月に荒行き、つひにはあとかたもなくなりはて、是等の事を語り傳ふる人もなくならんを、誰ありてあはれといひて一錢の参物をだに供する人も無きは、世には忠孝に感ずる人のすくなきにや。あまりにあはれに覚えしかば、くはしく書付け歸れり。

(東遊記)

吉田絃二郎

名は源次郎、佐賀縣の人、小説家、劇作家、明治十九年(五十五)生。

松禪尼

佐藤繼信・忠信兄弟の母。

小松

繼信の妻。

小秋

忠信の妻。

いかう

六へん

一三出 陣

吉田 絃二郎

正面の戸開き、松禪尼、佐藤繼信、小松、座にゐる。燭臺、薙刀などよるしく。やがてうしろの障子を取りはずす。平泉の雪景色。月をりく、雲に隠る。忠信と小秋入來る。

小松 忠信殿、お歸りなさつたか。母様もいかうお待ちなされました。

忠信 わしは兄上のやうに落著いてをれぬのぢや。早う出陣が致したのでござる。

繼信 急がずとも出陣は今宵。めでたう再び陸奥むつに歸り來るまでは、母上とも御目にかゝることはあるま

い。

忠信 (しんみりとなり) 二十年の春秋、天にも地にもたゞ一人の母上……。

小松 一時いつときでも長う母様に顔見せてお置きなさるが孝行といふもの。

忠信 え……もう戰場に立つからは、孝行も何もござらぬ。なう母上……。(そつと涙を隠す)

松禪尼 よういやつた。今宵限り母ありと思ふな、妻ありと……。(嫁たちを見てしんみりと思ふな。忠信は初陣のことではあり、小秋、そなたも忠信に嫁いで僅か半年、繼信、忠信二人の兄弟を戰場に出してやる母とし

春秋、年月

いやる

初陣

判官様
源義經をいふ。
悲しう。

て、不便に思はぬでもなけれど、あまりにお痛はしい
判官様のお身の上が思はれて……ゆるして下され。
小松 私は覺悟致してをりますれば、悲しうは思ひませ
ぬ。たゞ小秋殿が……。

小秋 姉様、何を仰つしやる。忠信出陣かなはずば、悲し
うもござりませうなれど、出陣おゆるし下されしお
情、嬉しうこそ思ひますれ……。

松禪尼 今日からは小松・小秋、そなたたちを繼信・忠信と
も思ひ、わたしは心やすう……おゝさうぢや、あの陸
奥の雪の山のやうに靜かに、二人の凱陣を……いや、
もしめでたう凱陣する日もあらば、その日を待つて

おませうぞ。

小松 母様、何を仰せられまする。兄弟揃うてめでたう
御凱陣は知れたこと、なう繼信殿。

藤五、下手より登場、下にしゃがみゐる。

繼信 うむ、拔群の功をたて、兄弟揃うて凱陣致しまする
とも。なう忠信。(涙を隠す)

忠信 母上へのおみやげには、平家方の軍勢を駿河・遠江
の戰場より追ひに追ひまくり、瞬く暇に京・福原、續い
ては四國の海か九州のはて、潮の中に追落し、潔い軍
の物語を致しませう。

松禪尼 勇ましいことぢや。忠信來よ。(と忠信の甲冑を直

知れたこと

藤五

瀬尾見藤五、從僕。

拔群

駿河・遠江

いづれも靜岡縣。

福原

今、神戸市の内、
當時、平清盛の別
荘があり、一時都
にもたつてゐた。

してやる。一步故郷を出でなば、繼信を母とも思へ。
 なう繼信。忠信のこと頼みまするぞ。いかなる時
 にも兄の側離れまいぞ。討死するとも兄弟一緒に
 枕を並べて討死せよ。兄弟一緒に死にやつたら魂
 も迷ふまい。

法螺貝の音、蹄の音聞ゆ。

松禪尼 さあ、行きやれ。

繼信 弟。

忠信 兄上。

二人立ちあがる。

泉三郎 (下手より登場) お待ちなされ。判官様たゞ今これ

泉三郎
 名は忠衛藤原秀衛
 の三男。

面目も立つ

泉の館殿

泉三郎を指す。

白河の關

福島縣西白河郡古
 關村の邊にあつ
 た。

不肖ながら
 見え隠れに
 所存

へお立寄りなされます。

松禪尼 たゞ今兄弟の者、御館^{みだ}まで參上致させまする。

それはまたあまりに勿體ないことでござりまする。

泉 いや、忠信殿のことお話し申し上げたるところ、判

官様には殊の外の御よろこび、我等の面目も立ち、こ

のやうに嬉しいことはござらぬ。

松禪尼 この上とも泉の館殿^{みだ}、兄弟の御とりなし、よろし

うお願い申しまする。して、泉の館殿には……。

泉 白河の關越ゆるまでは、不肖ながら泉三郎御あと

を慕ひ、見え隠れに御警護申す所存でござる。

松禪尼 何から何まで御念の入つた御とりはからひ、判

官様にも、さぞ。

若侍判官様お越しにござりまする。

繼信何判官様お越しなされたとな……。

松禪尼 お出迎へ致せ。(入々下手へ寄り、出迎ふ。)

源義經 (下手より登場そのまゝ)。この雪の夜中、老體に

障ありては如何。(縁の上へのぼる。)

武藏坊常陸坊伴金剛堀片岡杉目等從ふ。

松禪尼 恐れ入りましたござりまする。繼信、忠信、たゞ

今一黨の者どもを引きつれ、御館へ馳參ずる所存の

ところ、面目次第もござりませぬ。

義經 義經が陸奥へ參つてよりこの七年が間、そなたは

武藏坊 辨慶
常陸坊 海尊
伴 七郎治知
金剛 次郎秀方
堀 源太郎景光
片岡 八郎弘常
杉目 小太郎行信

父・母

父は源義朝、母は常磐御前。

片敷く

夜さ

我がためには、まことの母も及ばぬほどの親切。幼

くして父にも母にも縁拙く、錦の褥しじもに臥すととも、親

の情を知らぬ義經、鎧の袖を片敷きて、母こひしと夢

みしことも幾夜さか。そなたこそ、まことの母の情

をば、この義經が胸に教へてくれた大事な人ぢや。

松禪尼 勿體なや、もうそのやうなおやさしいこと仰せ

られますな。御出陣に際し、そのやうなお言葉たま

はりては、泣かじと思ふこの婆の決心も鈍りまする。

……その時、繼信は十六歳、あなた様は御十五歳、弟忠

信は十三歳、勿體なきことながら、この婆はあなた様

を我が子のやうに思ひましてござりまする。おゆ

るし下されませ。

義經 その情の有難さ、義經たとひいづこの戰場に果てんとも忘れは致さぬ。一たび陸奥を出でては、再びそなたに逢ふこともはかり難く、まことの母に別る悲しみもかくあらん。年來のそなたの情、改めて禮を申したく、名残を惜しみたく、今宵訪ねて参つたのぢや。

濱篠
松禪尼の俗名

松禪尼 おやさしいお心、この濱篠を……この婆を……もう泣かしては下さりまするな。

過分

義經 その上、繼信を伴なふさへ義經心苦しく存ずるに、忠信まで今宵出陣さするそなたの志、過分に思ふぞ

よ。

松禪尼 繼信、忠信の兄弟も、今日よりはあなた様を君と仰ぐ果報者。源家の御曹司九郎判官義經様、今日のり、しき御出陣のお姿を拜しまするにつけても、夫莊司元治世にながらへてありませうなれば、老いたりとも御轡を取つて御供致しませうに。不束ながら二人の伴、別しては佐藤一黨の者ども百六十三騎一人残らず出陣のお供致させまする。

果報
果(木)
御曹司
りし
不束ながら

義經 義經にとりては百萬騎の身方にも増す勇士たち、忝う存ずる。殊に繼信、忠信の兄弟を戰場につれ行かば、後に歎かん人々の心も察せられ(と小松、小秋を見て)

いとしう。

果報

しはよめ

何ぼう

御城中
藤原秀衡の平泉
館。
一 關
今の岩手縣一關
町、平泉の南方に
ある。

繼信。忠信兄弟のことは、義經身に代へてもいとしう
思ふであらうぞ。

小松 勿體なきその御言葉、あなた様ほどの大將を君と
あがむる繼信の果報。

小秋 もし我が君の御馬前に忠信が討死でも致しまし
たら、何ぼう嬉しいこととござりませう。

蹄の音。 泉三郎の家來まさき榎木多聞次下手より登場。

泉三郎 多聞次ではないか。

多聞次 は、御仰に従ひ、御城中の動靜を窺はせおしまし
たるところ、夜に入りて御搦手よりひそかに五六百
騎の若者ども、雪を蹴つて、一關いちのせきあたりへ参りました

る趣にござりまする。

繼信 泉の館殿の御推察は。

泉 もし我に乗すべき虚あらば、乗せんとの下心か。

忠信 たかが五百六百の腰拔武士、人々の手はわづらは
さぬ。戦の血祭、幸先よし。忠信たゞ一騎にて踏み
にじらん。

繼信 忠信の仰々しや。踏みにじるまでもなし。我が

君の進ませ給ふところ、たかの知れたる木つ葉武者、
影をひそめて退散せん。

忠信 またしても兄上の悠長な。馬曳け。

義經 待て、忠信。そなたの馬は足を傷めてゐると聞い

乗すべき虚
虚(虚・六畫)
下心

仰々し

たかの知れたる

引出物

乗替

た。この場の引出物、繼信には我が太刀、忠信には我が乗替を與へるであらう……誰か馬を曳け。

武藏坊、太刀を繼信に渡す。馬、上手より。

繼信（太刀を母に見せ）忝う頂戴致しまする。

忠信 有難く頂戴致しまする。

馬の手綱を取り、庭前を一まはり廻す。

松禪尼 そちは日本一の果報者ぢや。名取川のほとり

名取川
今の宮城縣の南部にある川で、東流して太平洋に注ぐ。

にはまだお前たちの祖父様、祖母様もお出でなさる。名取川を渡る頃は、祖父様、祖母様に聲かけて喜ばせてあげよ。拜領のお馬を拜見させてあげよ。

法螺貝の音響く。

手燭



二條城の清正

吉田絃二郎著、七篇からなる戯曲集、昭和十一年三月、一月刊行。

義經 濱篠、さらばぢや。

松禪尼 我が君様。

繼信 母上。

忠信 母上。

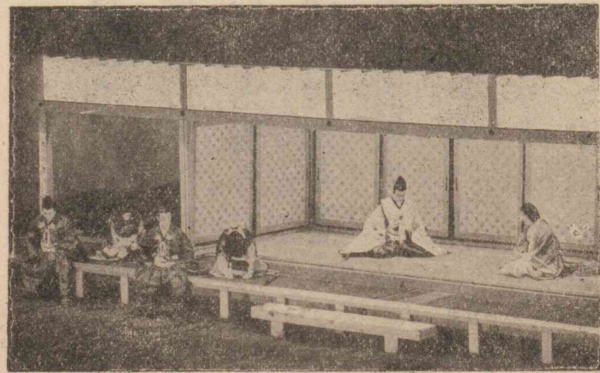
松禪尼 あゝ、繼信、忠信……。

小松 繼信殿。

小秋 忠信殿。

人々下手花道へ退場。忠信は自身馬の手綱を取り、ちよつと見返る。藤五は馬の後より歩む。松禪尼は手燭を抱へ持ち、じつと見送る。小松、小秋、左右より母をたすける。月曇り、雪はげしく降る。――幕下

（二條城の清正）



義經出陣舞臺面

一四夜話

翁

二宮翁名は尊徳、通稱は金次郎、相模(神奈川県)の人、江戸時代末期の實踐道徳家、安政三年(五十六)歿、年七十。

良農

いはゆる

至誠神の如し

中庸二十四章に出てゐる。

刻苦經驗す

刻(力・リ・六畫)發明す

翁いはく、山芋掘は山芋の蔓を見て、芋のよしあしを知り、鰻釣は泥土の様子を見て、鰻の居ると居らざるとを知り、良農は草の色を見て、土の肥えたと瘠せたとを知る、皆同じ。いはゆる「至誠神の如し」といふものにして、永年刻苦經驗して、發明せるところなり。技藝にこの事多し。侮るべからず。

翁いはく、家屋の事を、俗に家船やぶねまた家臺船やたいぶねといふ。おもしろき俗言なり。家をば實に船と心得べし。こ

乗合

協協(十)

専務

れを船とする時は、主人は船頭なり、一家の者は皆乗合なり、世の中は大海なり。然る時は、この家船に事あるも、また世の大海に事あるも、皆遁れざる事にして、船頭は勿論、この船に



二 乗合やぶねひたる者は、一心協力この家船を維持すべし。さて、この家船を維持するは、楫の取りやう

と、船に穴のあかぬやうにするとの二つが専務なり。この二つによく氣をつくれれば、家船の維持疑なし。然

歎息

るに楫の取りやうにも心を用ひず、家船の底に穴があきても、これを塞がんともせず、安閑として歳月を送らば、終に家船は沈没するに至らん。歎息の至ならずや。たとひ大穴ならずとも、少しにても穴があきたらば、速に乗合一同力を盡くして穴を塞ぎ、朝夕ともに穴のあかざるやうによく、心を用ふべし。これこの乗合の者の肝要の事なり。然るに既に大穴あきて、なほこれを塞がんともせず、おの／＼己が心のまゝに安閑と暮しゐて、誰か塞いでくれさうなものだ。と待ちてゐて濟むべきや。助船をのみ頼みにしてゐて濟むべきや。船中の乗合同、身命をも抛ちて働かずばあるべから

ざる時なるをや。

硯箱の墨曲れり。翁これを見ていはく、すべての事を執る者は、心を正平に持たんと心がくべし。たとへばこの墨の如し。誰も曲げんとてする者はあらねど、手の力自然傾くが故に、この如く曲るなり。今これを直さんとすとも、容易に直るべからず。百事その通りにて、喜怒愛憎ともに、自然に傾くものなり。傾けば曲るべし。よく心掛けて、心は正平に持つべし。

翁いはく、凡そ物一得あれば一失あるは、世の常なり。

世話

おほよそ

二宮翁夜話

尊徳の門人福住正
兄編著、五卷、續
篇一卷、二百八十
一章、尊徳の人生
觀・教訓等を隨筆
體に録したもの、
大正十二年(五六三)
刊行。

人の衣服に於ける甚だ煩はし。四季をりくゝの氣候に合はせてこれを仕立て、また縫ひかへ、洗濯などして、常に休む時なし。禽獸のおのづから羽毛ありて、寒暑を凌ぎ、生涯損ずることなく、染めずして彩色ありて、世話なきに如かざるが如しといへども、蚤・虱・羽蟲など、羽毛の間に生じ、これを追ふにまた暇なきを見れば、人の衣服のぬぎ着自在にして、洗濯の自由なるに如かざること遠し。世の他を羨むの類凡そこの如きものなり。

二宮翁夜話

森 鷗外

名は林太郎、醫學博士、文學博士、陸軍軍醫總監、帝室博物館總長、宮内省圖書頭、帝國美術院長、大正十一年(三五三)薨、年六十一。

安 壽

岩城判官正氏の女。

廚子王

安壽の弟。

木 戸

山椒大夫

丹後國(京都府)由良の長者。

禿(木)

一五 安壽と廚子王

森 鷗外

ある朝、二人の子供は背に籠を負ひ腰に鎌を挿して、手を引合つて木戸を出た。山椒大夫の所に來てから、二人一緒に歩くのはこれが初である。

山の麓に來た時、廚子王は言つた。

「姉さん、わたしはかうして久し振りと一緒に歩くのだから、嬉しがるなくてはならないのですが、どうも悲しくてなりません。わたしはかうして手を引いて居ながら、あなたの方へ向いて、その禿かちになつたお頭かぶを見ることが出來ません。姉さん、あなたはわたしに隠し

て、何か考へて居ますね。なぜそれをわたしに言つて聞かせてくれないのです。」

安壽はけさも毫光のさすやうな喜を額に湛へて、大きい目を輝かしてゐる。併し、弟の詞には答へない。たゞ引合つてゐる手に力を入れただけである。

山に登らうとする所に沼がある。汀には去年見た時のやうに、枯葦が縦横に亂れてゐるが、道端の草には黄ばんだ葉の間に、もう青い芽の出たのがある。沼のほとりから右に折れて登ると、そこに岩の隙間から清水の湧く所がある。そこを通り過ぎて、岩壁を右に見つゝ、うねつた道を登つて行くのである。

毫光
毫(毛)

丁度岩の面に朝日が一面に射してゐる。安壽は、重なり合つた岩の間に根を下して、小さい莖の咲いてゐるのを見附けた。そして、それを指さして廚子王に見せて言つた。

「御覽、もう春になるのね。」

廚子王は黙つて頷いた。姉は胸に祕密を蓄へ、弟は憂ばかり抱いてゐるので、とかく受應へが出来ずに、話は水が砂にしみ込むやうにとぎれてしまふ。

去年柴を刈つた木立の所に來たので、廚子王は足を止めた。

「姉さん、こゝらで刈るのです。」

頷(頁)
受應へ

訝る
雑木林

外山
石浦

今の京都府加佐郡
由良村にある。
大雲川
一名由良川。



「まあ、もつと高い所へ登つて見ませうね。」
安壽は先に立つてずん／＼登つて行く。廚子王は訝りながら附いて行く。暫くして雑木林よりは餘程高い、外山の頂とも言ふべき所に來た。安壽はそこに立つて、南の方をじつと見てゐる。目は石浦を経て由良の港に注ぐ大雲川の上流を辿つて、一里ばかり隔つた川向かふにこんもりと茂つた木立の中から、塔の尖の見える中山に止つた。そして、「廚子王や」と弟を呼びかけた。
「私が久しい前から考へ事をしてゐて、お前ともいつもの様に話をしないのを變だと思つてゐたでせうね。」

小萩
山椒大夫の召使。

伊勢
國名、今の三重縣の大部分。

中山
由良の南六軒ばかりの處にある村落、今は東雲村と言つてゐる。

筑紫
九州及びその屬島全部に互つての古稱。

佐渡
新潟縣、新潟の西方の海中にある島。

岩代
國名、今の福島縣の半ば。

もう今日は柴なんぞは刈らなくても好いから、私の言ふ事を好くお聞き。小萩は伊勢から賣られて來たので、故郷から此の土地迄の道を、私に話して聞かせたがね、あの中山を越して往けば、都はもう近いのだよ。筑紫へ行くのはむづかしいし、引返して佐渡へわたるのも、たやすい事ではないけれど、都へはきつと行かれます。お母様と御一緒に岩代を出てから、私共は恐しい人にはかり出逢つたが、人の運が開けるものなら、善い人に出逢はぬにも限りません。お前はこれから思ひ切つて、此の土地を逃延びて、どうぞ都へ上つておくれ。神佛のお導で、善い人にさへ出逢つたら、筑紫へお下り

お父様
奥羽五十六郡の太
守岩城判官正氏。

かれひ。

になつたお父様のお身の上も知れよう。佐渡へお母様のお迎に行く事も出来よう。籠や鎌は棄てて置いて、餉^{かひけ}笥^けだけ持つて行くのだよ。」

廚子王は黙つて聞いてゐたが、涙が頬を傳つて流れて來た。

「そして、姉さん、あなたはどうしようと言ふのです。」

「わたしの事は構はないで、お前一人でする事を、わたしと一緒にする積りでおくれ。お父様にもお目に掛り、お母様をも鳥からお連れ申した上で、わたしを助けに來ておくれ。」

「でも私が居なくなつたら、あなたをひどい目に逢は

構は。構と。

烙印

いぢめる

せませう。」

廚子王の心には烙印をせられた恐しい夢が浮かぶ。「それはいぢめるかも知れないがね、わたしは我慢して見せます。金で買った婢^{はしや}を、あの人達は殺しはしません。多分お前が居なくなつたら、わたしを二人前働かせようとするでせう。お前の教へてくれた木立の所で、わたしは柴を澤山刈ります。六荷迄は刈れないでも、四荷でも五荷でも刈りませう。さあ、あそこまで降りて行つて、籠や鎌をあそこに置いて、お前を麓へ送つて上げよう。」

かり言つて、安壽は先に立つて降りて行く。廚子王

物につかれる

はなんとも思ひ定めかねて、ぼんやりして附いて降りる。姉は今年十五になり、弟は十三になつてゐるが、女は早く大人びて、その上、物につかれたやうに、聰さとしく賢さかしくなつてゐるので、廚子王は姉の詞に背くことが出来ぬのである。

木立の所まで降りて、二人は籠と鎌とを落葉の上に置いた。姉は守本尊を取出して、それを弟の手に渡した。

「これは大事なお守だが、今度逢ふ迄お前に預けます。此の地藏様をわたしたと思つて、護刀と一緒にして大事に持つてゐておくれ。」

守本尊

討手

「でも姉さんにお守が無くては。」

「いゝえ、わたしよりはあぶない目に逢ふお前にお守を預けます。晩にお前が歸らないと、きつと討手が掛ります。お前が幾ら急いでも、當り前に逃げて行つては、追附かれるに極つてゐます。さつき見た川の上手を和江わえといふ所まで往つて、首尾よく人に見附けられずに向かふ河岸へ越してしまへば、中山迄もう近い。そこへ往つたら、あの塔の見えるたお寺に這入つて、隠してお貰ひ。暫くあそこに隠れてゐて、討手が歸つた後で、寺を逃げてお出で。」

「でも、お寺の坊さんが隠して置いてくれるでせうか。」

和江

大雲川の左岸、中山の向かひ、由良の南約四軒。(一〇四頁地圖参照)

運試し

「さあ、それが運試しだよ。開ける運なら、坊さんがお前を隠してくれませう。」

「さうですね。姉さんの今日おつしやる事は、まるで神様か佛様がおつしやるやうです。私は考を極めました。なんでも姉さんのおつしやる通りにします。」

「おう、よく聞いておくれだ。坊さんは善い人で、きつとお前を隠してくれます。」

「さうです。わたしにもさうらしく思はれて來ました。逃げて都へも往かれます。お父様やお母様にも逢はれます。姉さんのお迎ひにも來られます。」
厨子王の目が姉と同じ様に輝いて來た。

「さあ、麓まで一緒に行くから、早くおいで。」

二人は急いで山を降りた。足の運びも前とはちがつて、姉の熱した心持が、暗示のやうに弟に移つて行つたかと思はれる。

泉の湧く所へ來た。姉は餉筒に添へてある木の椀を出して、清水を汲んだ。

「これがお前の門出を祝ふお酒だよ。」

かう言つて、一口飲んで弟に差した。弟は椀を飲干した。

「そんなら姉さん、御機嫌よう。きつと人に見附からずに、中山まで参ります。」

そんなら（それなら）

廚子王は十歩ばかり残つてゐた坂道を、一走りに駈降りて、沼に沿うて街道に出た。そして、大雲川の岸を上手へ向かつて急ぐのである。

安壽は泉のほとりに立つて、並木の松に隠れては又現れる後影を小さくなるまで見送つた。そして、日は漸く午に近づくのに、山に登らうともしない。幸に今日は此の方角の山で木を伐る人がないと見えて、坂道に立つて時を過す安壽を見咎めるものもなかつた。

後に同胞を捜しに出た山椒大夫一家の討手が、此の坂の下の沼の端で小さい藁履を一足拾つた。それは安壽の履であつた。

中山の國分寺

今京都府與謝郡中山村大字國分に現存してゐる。

劍戟

山門

宸翰

東大寺

奈良にある華嚴宗の大本山。

權幕

けおされる

わつば

機智

藤原師實

關白太政大臣、康和三年二月二十、年六十。

丹後

今の京都府の一部。

其の日の夜更、勢こんで中山の國分寺を取圍んだ山椒大夫の手のものは、住持曇猛律師の「逃げた下人を捜しに來られたのぢやな。當山では住持のわしに言はずに人は留めぬ。わしが知らぬから、そのものは當山にぬ。それはそれとして、夜陰に劍戟を執つて、多人數押寄せてまゐられ、山門を開けといはれた。さては、國に大亂でも起つたのか、公の叛逆人でも出來たかと思つて、山門を開けさせた。それに何ぢや。御身が家の下人の詮議か。當山は勅願の寺院で山門には勅額を懸け、七重の塔には宸翰金字の經文が藏めてある。こゝで狼藉を働かれると、國守は責を問はれるのぢや。又、總本山東大寺へ訴へたら、都からどのやうな御沙汰があらうも知れぬ。そこを考へて早う引き取られたがよからう。悪い事は言はぬ。御身達のためぢや」といふすばらしい權幕にけおされ、又、そのわつばはな、わしが午頃鐘樓から見ると、築地の外を通つて南へ急いだ。か弱いかはりに身が軽い。もう大分の道を行つたぢや」といふ鐘樓守の機智にあやつられて、すごとくと引きとつた。中二日おいて律師は廚子王を京都まで送り届けてくれた。守本尊のお蔭で時の關白藤原師實に知られた廚子王は、元服して正道と名告り、遂に丹後の國守

に任せられた。國守は最初の政として、丹後一國で人の賣買を禁じた。そこで、山椒大夫も悉く奴婢を解放し、國守の恩人曇猛律師は僧都にせられ、國守の姉をいたはつた小菘は故郷に還され、安壽の入水した沼のほとりには尼寺が建つことになつた。

正道は任國の爲にこれだけの事をして置いて、特に暇を申し請うて、微行して佐渡へ渡つた。佐渡の國府は雑太と言ふ所にある。正道はそこへ行つて、役人の手で島中を調べて貰つたが、母の行方は容易に知れなかつた。

或日、正道は思案に暮れながら、一人旅館を出て市中を歩いた。其の中いつか、人家の立ち並んだ所を離れて、畑中の道に掛つた。空はよく晴れて日があかく

請う(請ひ)
微行する

國府
雜太
佐渡國新潟縣佐
渡郡

檻
襖
すわる

と照つてゐる。正道は心の中に、「どうしてお母様の行方が知れないのだらう、役人などに任せて調べさせて、自分が捜し歩かぬのを、若しや神佛が憎んで逢はせて下さらないのではあるまいか。」などと思ひながら歩いてゐる。ふと見れば、大分大きい百姓家がある。家の南側の疎な生垣の内が土を敲き固めた廣場になつてゐて、其の上に一面に蓆が敷いてある。蓆には刈取つた粟の穂が干してある。其の眞中に檻襖を着た女がすわつて、手に長い竿を持つて、雀の來て啄むのを逐つてゐる。女は何やら歌のやうな調子でつぶやく。正道はなぜか知らず、此の女に心が牽かれて、立止つて

塗れる
塗(土)
めしひ

瘡病

覗いた。女の亂れた髪は塵に塗れてゐる。顔を見れば盲である。正道はひどく哀に思つた。其のうち、女の眩いてゐる詞が、次第に耳に慣れて聞分けられて來た。それと同時に正道は瘡病のやうに身内が震つて、目には涙が湧いて來た。女はかう言ふ歌を繰返して眩いてゐたのである。

安壽戀しや、ほうやれほ、

廚子王戀しや、ほうやれほ、

鳥も生あるものなれば、

疾うく逃げよ、逐はずとも。

正道はうつとりとなつて、此の詞に聞惚れた。其の

臟腑

臟(肉)

こらへ(こらぶ)

粟の穂



うち臟腑が煮返るやうになつて、獣めいた叫が口から出ようとすると、齒を食ひしばつてこらへた。忽ち正道は縛られた繩が解けたやうに垣の内へ駈込んだ。そして、足には粟の穂を踏散らしつゝ、女の前に俯伏した。右の手には守本尊を捧げ持つて、俯伏した時にそれを額に押當ててゐた。

女は雀でない大きいものが粟をあらしに來たのを知つた。そして、いつもの詞を唱へ罷めて、見えぬ目で見つと前を見た。其の時、干した貝が水にほとびるやうに兩方の目に潤ひが出た。女は目があいた。

「廚子王」と言ふ叫が女の口から出た。二人はひつたり抱合つた。

(鷗外全集第四卷)

ほとびる

鷗外全集

十八卷、鷗外の全
著作を集む、大正
十二年(一九二三年)一月
一昭和二年(一九二七年)
十月刊行。

小堀杏奴

東京市の人、畫家
小堀四郎の夫人、
故森鷗外の次女、
明治四十二年二月
廿生。

一六 董

小堀 杏奴

或朝、私は起きて見ると、頭が重くて胸が悪いことに気がついた。病氣になることは厭だつたので、なるべくなら隠しておかうと思つたのだが、たうとう出かける間際になつて母に言つてしまつた。

その日、私は父と一緒にもう一つの役所の圖書寮へ行くことになつてゐたのだ。父はもうすっかり支度をして、玄關にまで出てゐた。

母は洗腸をしなければいけないと言出した。私は八つの時、赤痢で死にかけてた時、毎日二回位洗腸をさせ

圖書寮

宮内省の一局、皇
統譜、王公族譜に
關する事項、詔書、
勅書及び皇室令の
正本尙藏に關する
事項、圖書の保管、
出納に關する事項
等を掌る。

洗腸

られて、それ以來何より恐しいものになつてゐたのだ。

「お父さん、先へ行つちやいや。」

「うん。」



森 鷗 外

こんな問答をしてゐる間に、母が奥から出て來た。

「杏奴ちゃん、言ふこと
きかないのもいゝかげ

んになさい。お父さん、先へいらしつて下さい。」

父は黙つて出て行つた。

私がどうしても厭だと言つて聞かないので、母はた

うとう洗腸器を持つて追ひかけて來た。

しかたがないから、私は靴をはくが早いかな、どん／＼表へ駈出した。振返つて見ると、母は残念なやうな曲つたやうな顔をして、私を見送つてゐた。私は苦しいのをこらへて歩いた。父はもう行つてしまつたにちがひない、さう思ふと、無暗に心細くなつたが、ともかく表通りまで出て見ると、團子坂の上にある大きな邸の塀の傍にステッキを杖にして、しやがんで此方を見てゐる父を發見した。

父は私を見ると、杖をあげて二三度上下に動かして微笑して見せた。私は安心して父に掴まつて歩いた。

團子坂

東京市本郷區、鴨外の邸は、東京市本郷區千駄木町で、團子坂の近くである。

電車は恐しく込んでゐた。そしてがたびし揺れながら、一停留所毎にとまつて、ゆつくり走つた。

私はみる／＼胸が悪くなつて來た。母の言ふことを聞かなかつたことが今になつて後悔されて來た。

「お父さん、胸が悪いの。」

父は傍にゐる人に席を譲つてくれるやうに頼んでゐた。

「子供が氣持が悪いつて言ふものですから。」

そんな言葉を私はぼんやり聞いてゐた。腰を掛ける少し好い氣持になつた。父は前の吊皮に掴まつて、私の顔を覗き込むやうにしながら、

「お母ちゃん(お母)父は私達が呼ぶ通りに、晩年、母のことをお母ちゃんと呼んでゐた。のいふことを聞いて家にゐればよかつたな。」

と言つた。電車から降りて冷い風にあたると、私は餘程氣持よくなつたが、圖書寮へ行く坂の途中で、たうとうもどしてしまつた。私は泣きながら、溝の中へ吐いた。

「よし／＼、吐けばなほる。」

脊中をさすりながら、父はさう慰めた。

「どうだ、吐いてしまふといゝだらう。」

父はいつもの微笑を浮かべ、かくしから丁寧に三つ

折にした塵紙を出して、その一枚で私の涙をふいてくれた。

私はすつかり氣持が好くなつて、でもまだぐつたりしながら父の腕に摺まつて歩いた。

その日私はまた澤山數學をやらせられた。

「少し散歩しようか。」

二人は庭に出て、人のゐない裏の原つばの方へ歩いて行つた。短くすりきれた枯野原が廣々と續いて、枯木がぼつ／＼と立つてゐた。もう沈みかけた夕陽が、白い建物の一部にうすあかい光を投げ、冷たい風が野原の中を荒々しく走り廻つてゐた。

父は大きい、灰色がかつた外套を着て、ゆつくりゆつくり歩いた。

不意に立ちどまると、父はかくしから白い象牙の、いつも洋書の頁を切る時使ふ紙きりを出して、土を掘りはじめた。乾いた土がぼろ／＼と散つた中に、小さい菫の葉が出てゐたのだ。父の大きく震へる白い手が、根ごと菫を掘るのを私は見てゐた。

もうぢき春が来る——私はなんとなくさう思つた。「家へ歸つて、庭へ植ゑよう。」

父は楽しいことを打明けるやうな小さい聲で言つた。

（晩年の父）

晩年の父

小堀香奴著、父嶋外の晩年の思出を叙したもの、昭和十一年（三五六）二月刊行。

島崎藤村

名は春樹、長野縣の人、小説家、詩人、明治五年（三五）三生、節供。

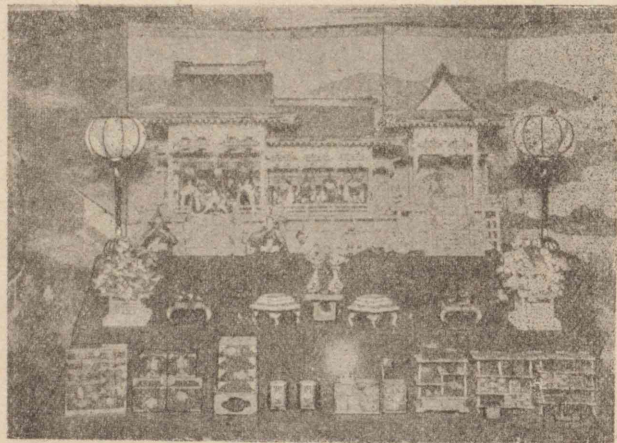
一七 桃

島崎藤村

三月の桃の節供は、五月の菖蒲の節供と共に、一年のうちのある祭の日の中でも、私達に特別の親しみを覚えさせる。それは季節の感じが深いといふばかりでなく、子供のための祝の日であるからであらう。最早この世に居ない身内の人達の形見として残つたやうな古い雛などの取出されるのも、さういふ日だ。幼いものはその日を迎へて、自分等の成長を楽しみ、大人はその日をむかへて、自分等の少年時代をなつかしむ。



白酒ひし餅桃の花の掛物、三月の節供を祝ふもので、一つとしておとぎ話の情調を誘はないものはない。今にも合唱でも始めさうな雛、古風な少年音楽隊のやうな五人ばやし、そこにある一切のものが皆玩具だ。童話と童謡との世界のものばかりだ。あれは、自分等の國にのみあるやうな子供の祭かも知れない。でも、優しい風俗だと思ふ。あの節供を祝ふ豆いりの種にも紅と白とあつて、桃の蕾のやうに見えるのもよい。五月の菖蒲が男の兒にふさはしいやうに、桃の花は自ら少女にふさはしい。長い花房をうなだれ、花瓣の胸をひろげて、物思ひに沈んだやうな海棠のすがたは、



祭 雛

到底少女のものではない。茶色でやゝ紅味を帯びた枝の楚すばえに、堅くつけたあの桃の花の頸こそ少女のものだ。二尺にも三尺にも及ぶほど勢込んで延びて来て居るやうな、その楚を見たばかりでも、生ひ先こもる少女の生命を思はせるものがある。素朴にふくらんだところが河柳の野趣に似てもつと羞ぢらひを含み、しかも、處女らしい誇を見せて居るものは、

黄梅



福壽草



連翹



無關心

桃の蕾だ。
 長い冬を通り越して、黄梅、福壽草、連翹などの季節も
 過ぎ去り、梅には既に遅く、櫻にはまだ早いといふ頃に、桃
 の花の春が来る。ほつく、暖い雨がやつて来て、草の
 芽を延ばす頃の楽しさは、何にたとへやうもない。長
 い冬の眠から眼をさまして、また「生命」の蟲が這出すの
 もその頃だ。一雨毎に春の来るやうな氣のするもの
 その頃だ。全く桃の花の楽しさは、櫻や牡丹のやうに
 私達を酔はしてしまはないで、寧ろ春先の蘇生の思を
 與へるやうなところから来る。冷たく無關心になつ
 てしまつた私達の心を温めて、少女の春を想はせるや

我が衣に
 芭蕉の句
 あらはす

しづく

任口上人

律僧、伏見西岸寺
 第三世。

昔の詩人

松尾芭蕉、伊賀國
 (三重縣)の人、俳
 人、元祿七年(三五
 巴)歿、年五十一。

公司
 租界
 租祖租

うなところから来る。

「我が衣きぬに伏見の桃の雫せよ。」桃に寄せて、こんなや
 さしい感情をいひあらはして見せた昔の人すらもあ
 る。桃のしづくは、果してどんな衣を染めたらう。こ
 れは、可憐な婦人の身につげる襦袢の袖にでもうつり
 さうなものである。ところが、この處女のやうな感情
 は、伏見の西岸寺といふところで、任口上人といふ人に
 會つた時の、昔の詩人の心胸から溢れて来て居るのだ
 からゆかしい。

かつて遠い船旅に上つて、上海の港に寄つたことが
 あつた。古河公司の人に案内されて、佛蘭西租界の方

李鴻章
 字は漸甫、清末の
 大政治家、(西曆六
 三―七二)
 そこいら(そこら)

まで辻馬車を驅り、支那風な庭園で知られた愚園といふところにもしばらく時を送り、それから、李鴻章の故廟の跡を訪ねた。革命後の民國には、李鴻章の銅像も用のない遺物のやうに、小高い築山の上に引倒してあつた。一代の榮華は見る影もない。そこいらの廢れた庭園の有様は、まるで夢の跡だつた。たゞ故廟の建築物などに、在りし日の面影をとゞめて居た。その建築物も學校に代用されて居るとかで、支那風な瓦屋根や、特色のある窓や、白い壁などが昔を語り、顔にそこに残つて居た。そんな破壞の動いて行つた跡にも、紅い桃の花の今をさかりと廢園の一隅に咲出て居るのが

マルセイユ

フランス南部の港
 市、リヨン灣に臨
 む。

マロニエ



在留する

櫻桃



リモージュ

フランス中部の都
 會、作者は歐洲大
 戰をこゝに避け
 た。

眼についた。あの桃の花ほど上海での旅の感じを深くさせたものはなかつた。

支那より西の方の桃のことは知らない。マルセイユの港は、地中海に沿うたところで、氣候も我が國と大差のないやうに思はれたが、その植物園にも桃は見かけなかつた。春が來て巴里の街路にマロニエの花が咲く毎に、在留する美術家などと連立つては、あの都の郊外へよく出掛けたものだ。併し、櫻桃のそここゝに咲いたのはよく眼についたが、三年の旅の間、つひぞ桃の花を見かけなかつた。佛蘭西中部のリモージュまで旅して行つた時に、桃の木を見たやうな氣もする

憶 憶 憶

が、それもはつきりとしたことではない。今でも私は、あの果樹の多い佛蘭西の田舎家の裏庭を、そこに熟しかけて居た佛蘭西風の青い梨を、あり／＼と胸に浮かべることが出来る。それほど梨の記憶はあるが、どうも桃のことは残つて居ない。

桃は、殊にその花を愛することは、全く東洋の方の趣味の様な心地もする。よし佛蘭西あたりの田舎にあるとしても、自分等の國に見ると同じ様な、花からあの春の焰が流れて来る様なものかどうかは、ちよつと想像がつかない。桃は葉も好ましい。あの細長い葉の尖つたのは、何ともいつて見やうのない生氣を感じさ

信州

信濃國、今の長野

守山

佐久地方

北佐久郡

小諸

北佐久郡小諸町



蜜(蟲)一蜜(ハ)

藤村讀本

六卷、島崎藤村著、少年期から青年期に移り變る頃の人のため編まれた讀みもの、大正十五年(二五)二月刊行。

せる。茂り重なつた葉の間に、小さな球の様な青い實をつける頃もよい。氣のあつた友達とでも連立つて、やゝ疲れた時に、小鳥の囀る聲でも聞きながら靜かに歩いて見たいのは、桃の葉の蔭だ。桃で思ひ出した。信州の山の上にある守山といふ處は、佐久地方でも桃畑で知られて居る。小諸からあの守山までの道には、いゝ木蔭もあつて、日歸りにそこを歩いた時のことも忘れられない。青い桃の葉をかぎ、枝に熟した水蜜桃の香氣をかぎ廻つた後でも、ぎたての果實からしづくの滴る様なのを、桃畑の中の小屋で味はつた時のことも忘れられない。

(藤村讀本第四卷)

一八年中行事の興趣

編者

鳴雪
六八頁参照

屠蘇

七草粥

松の内

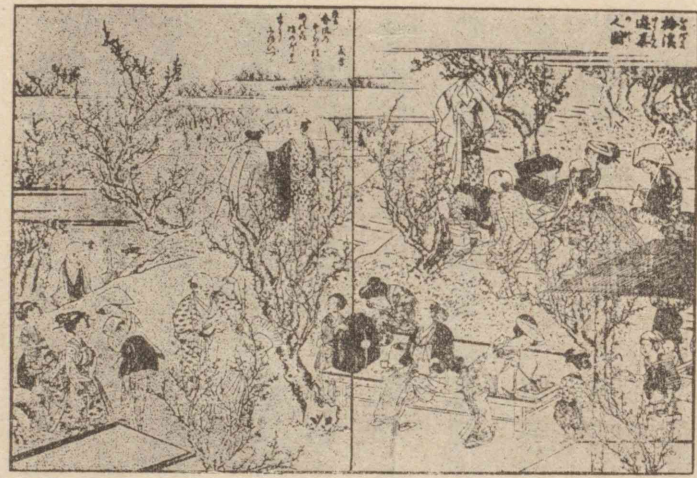
わが國のものところ思へ初日影 鳴雪
麗かにさしのぼる初日を君が御影にたぐへつゝ、一
家打揃つて屠蘇を汲交し、雑煮を祝ふ。注連繩門松の
門毎に飜る日の丸の旗も、
今日ばかりは神代の風にはためく思がする。三箇
日も過ぎると、七日は七草
粥。若菜摘んだ昔を偲び
つゝ、松の内を送る正月の



(成大事行中年) 始年

鬼やらひ

樞原神宮
奈良縣高市郡白樺
村、畝傍山の麓に
鎮座、官幣大社、
祭神は神武天皇と
媛蹈鞰五十鈴媛皇
后におはす。



(成大事行中年) 見梅

拜すれば、日本精神の新しく甦るのを感じずにはゐら

楽しさは、げにわが國獨得
のものである。

寒が明けると立春、その
前夜の節分には、福は内、鬼
は外。と豆撒く鬼やらひの
聲も勇ましく、神詣でのな
らはしも今に絶えない。

二月十一日は紀元節、遠く
神武天皇の創業を偲びま
つりつゝ、樞原神宮を遙に

嵐雪

服部氏淡路國兵庫縣の人、芭蕉の門人、寶永四年三月七歿、年五十四。

うたげ 坤徳

赫(赤)

れない。初午祭の太鼓の音のひびくのもこの頃。

梅一輪々々ほどのあたたかさ 嵐雪

三月三日は雛祭とて、桃の節供の名もなつかしき、少女の楽しい宴の日である。六日は地久節、坤徳の彌高きを仰ぐ。十日の陸軍記念日には、滿洲の荒野に奮戦した皇軍の赫々たるいさをしをたゞへ、今なほ北滿の國境を守る勇士の勞苦を想ひ、かねて、友邦新滿洲帝國の前途を祝福すべきである。春分は二十一日の頃、晝夜の長さ相等しく、皇室におかせられては御歴代の皇靈を祭らせられ、下々でも、俗に彼岸の中日とて、寺々は善男善女の參詣に賑はふ日である。

路通

八十村氏、芭蕉の門人、閑歴未詳

駘蕩として 三春 行樂

彼岸まへ寒さも一夜二夜かな 路通

春風駘蕩として、世はまさに三春の行樂に入らんとする頃、私達も嬉しく進級するのである。

四月三日は神武天皇祭。八日は灌佛會、花祭は甘茶の甘い匂につれて少年少女に御佛の國の幻想を描かせる。處によつての遅速はあるが、大和心の花櫻、盛は十五日前後であらう。

二十九日は天長の佳節、寶祚の無窮と聖壽の萬歳をことほぎ奉るめでたき日である。代々木原頭に兵をみそなはず御英姿を、ラヂオの中繼放送に偲び奉るも畏き極み、我知らず目頭の熱くなるのを覚えるのであ

寶祚 寶(一)

中繼放送

る。花はいつしか樹梢を去つて、天地は嫩かい若葉の

新緑につままれて、さわやかな五月が来る。

若葉して水白く麥黄

ばみたり 蕪村

二日又は三日は八十八

夜、去年しまひ忘れた朝顔

の種袋を探すのも一興。

五日は端午の節供、薰風に

大空を泳ぐ鯉轍、家々に飾

られたる武者人形、湯に浮

蕪村

本名谷口信章、攝津國大阪府の人、俳人、畫家、天明三年(西曆一八一三年)歿、年六十八、八十八夜

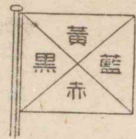


(成大事行中年) 灌佛

粽

三十年の昔、明治三十八年(西曆一九〇五年)五月二十七日のこと。Z信號「皇國の興廢此の戦にあり、各員一層奮勵努力せよ」の有名な信號である。

聖將



鬱陶



(成大事行中年) 端午の節供

からは愈梅雨の季節となる。

かぶ菖蒲のかをり、柏餅や粽の味も何とはなしに男子のものである。二十七日は海軍記念日、今ははや三十年の昔となつた日本海々戦の壯烈な物語に、Z信號をかゝげた護國の聖將東郷元帥を想ふ。青葉の色日増しに濃くなつて、六月も十二日の頃鬱陶しい日が續いて、農

色紙

たなばたつめ

季吟

北村氏、名は久助、
號は拾穂軒・湖月齋、近江國滋賀縣の人、歌人、俳人、國學者、寶永二年(三六五)歿、年八十二。

送り火

家は田植の準備に忙しい。

苗代の色紙にあそぶ蛙かな

蕪村

七月一日は山開。富士や南北アルプスの招き聲に登山家の魂はそらろにあこがれ始める。七日は七夕祭。竹につけた色紙短冊の天の河の文字、たなばたつめのため夜空に雨をきづかふ心もゆかしい。

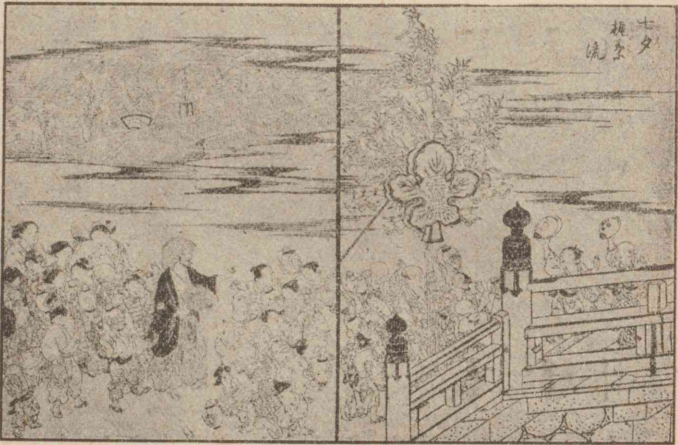
まざくと在すがごとし魂まつり 季吟

月の十五日は盆の精霊祭。門毎にたく十五日の送り火のはかなき光の末に、亡き人の姿を追ふもあはれである。

やがて長い夏休となる。旅行に登山に、旅行案内線

克服する

涼を納る



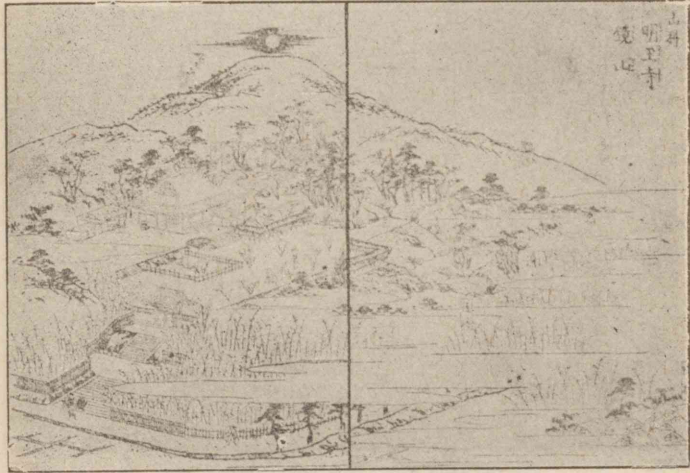
七夕 送り火 (會圖所名都) タ 七

りながらたてる計畫は實行よりもうれしい。八月の炎暑はたへ難いといふものの、暑さは避けるべきものでなくて克服すべきものである。元氣潑刺たる若者にとつてはむしろ修養の時期である。一日の汗を行水に流して、庭前に涼を納る、ゆふべの快さは、夏でなくては味はれぬものである。

虚子
六八頁参照

打水のしばらく藤の雫かな

虚子



（會圖所名都） 月 名 秋 中

九月、休暇は果ててもまだ残りの暑さは去りやらぬが、持寄る土産話に賑はふ新學期の、何となく爽涼の氣に満ちてゐるのも嬉しい。二百十日・二百二十日の厄日も事なく過ぎて、陰曆中秋の名月も来る。芒を手向け、團子や新芋、新豆を供へて、明月を心ゆく

中陰
秋曆

子規

六八頁参照

とみに

重陽の節供

豆名月

馨(香)

衷(衣・四書)

まで賞翫する興趣は、まことに東洋のものである。

明月の今年は遅き芒かな

子規

二十三日或は二十四日は秋季皇靈祭。秋涼とみに肌に入るの思がする。重陽の節供は陰曆の九月九日に當り、後の月所謂豆名月はその十三夜である。

十月十七日は神嘗祭。新穀もいつしか實のり、山には茸の香も馨しく、秋の木の実は味覺をそゝる。

十一月三日は明治節。秋空高く菊花薫るこの佳き日に、明治神宮、桃山御陵を遙拜して、明治大帝の御偉績を偲び奉り、明治聖代の榮を回顧するのは、日本國民の自らなる衷情である。

霰(雨)霽(雨)



(はらわ東本繪) 市の歳

過ぎて、歳晩も近づいて来る。

二十三日は新嘗祭。そ
ろく、霜も置きそめて落
葉の風に翻る音に晩秋の
氣も深くすんで来る。林
の奥にひびくは獵銃の音
であらう。
野分の風いつしか荒々
しく、霰を誘ひ、霰を交へ、小
雪を散らつかせつゝ、師走
の一日々々は飛ぶが如く
歳の市、大賣出に町行く

大正天皇祭

大正天皇、御名嘉
仁、第百二十三代、
大正十五年(丑念)
崩御、御年四十八。

人の足どりは忙しい。やがて二十五日の大正天皇祭
が来る。この日はまたクリスマスに當る。異國のな
らひながら、今はサンタクロースも子供にとつては忘
れられぬものとなつた。

古傘で風呂焚く暮や煤拂

虚子

迎年の準備滞りなくし果てて、僅かに残るひと時を
爐邊にうたゝ感慨にたへ難き折しも、外にはいつ降り
出したか雪の積るらしきけはひ。靜かに除夜の鐘が
ひびいて来る。

大年を早く寝ねたる子供かな

小波

小波

巖谷季雄、お伽話
作家、俳人、昭和
九年(丑五)歿、年
六十四。

沼田頼輔

神奈川縣の人、紋章學者、文學博士、昭和九年（五十六）歿、年六十八。

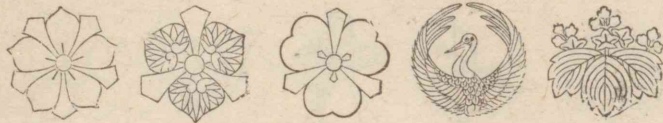
一九紋章

沼田 頼 輔

遺憾
遺憾—感
山内侯爵家
舊土佐（高知縣）高知藩主の家。
編纂
替紋
歐洲大戦争
西曆一九一四年七月勃發、一九一八年十一月休戦。

我が國では、家があれば苗字があります。そして、苗字があれば必ず紋所があり、近頃は白襟黒紋附とも申すくらゐで、禮服には必ず紋所を附けることになつて居りますが、さて、其の紋所に關する知識はといふと、由來は勿論、名前すら知られてゐない場合が澤山あります。私は常にこれを遺憾として居りましたが、先年山内侯爵家の家史編纂を依頼されて居りました頃、同家で桐の替紋を用ひて居られることについて、理解しかねて困つたことがありました。又、その後、歐洲大戦争

没頭する



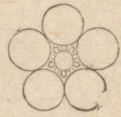
梗桔劔 葵劔三 草藥醉劔 丸鶴 桐佐土

の終らうとする時分に、大阪朝日新聞社から白耳義國王に鶴丸の紋の附いた太刀を献上する企があり、同社の海外特派員が、その紋所の由來につき邦人に尋ねたが解らなかつたため、英國の紋章學者に尋ねて、御下問の折の参考にしたといふことを聞きおよんで、甚だ遺憾に思つたことがありました。さやうなことが動機となつて、私は紋所の研究に没頭することになりましたが、その取調に基づき、我が國の紋章が、どういふ意味で用ひられたかといふことにつ

漿(水) 兜(几) 鍬形



脛楯



鉢梅劍



形鍬



角總



矢弓

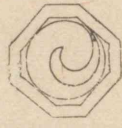


劔繫

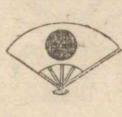
いて極めて大體のお話をして見たいと思ふのであります。

我が國の紋章といふものは、本來、武家時代に、或標章を旗や幕の目印として使つたのに始つたので、その結果武張つた意味を含んだ紋章が非常に多いのであります。例へば、劔酢漿草、劔葵、劔桔梗等いつて、劔の花の間に取合はせて居るのがそれで、それのみならず、兜の鍬形や、總角や、脛楯や、其の他弓矢は勿論、武器に關するものは、悉く紋所に用ひられて居るといつてもよいので

徳富蘇峰 名は猪一郎、熊本縣の人、歴史家、貴族院議員、文久三年(三五三)生、折敷



巴頭三



丸ノ日=扇



櫻山向



字文井

あります。但し、かういふ武張つた紋所は多く武家に用ひられたので、お公卿衆には、斯様な紋所を用ひて居るのが少しもありません。それ故、私はこの種類の紋所を尙武的紋章と申して居ります。

之を第一種として、第二種は戦争の際の功名手柄を後世に傳へる爲に作つた紋章で、私は之を記念的紋章と名づけて居ります。例へば、徳富蘇峰氏の紋所を見ますと、八角の中に巴が畫がかれてあります。八角といふのは隅切の折敷と申して、神様に

天草の戦争
寛永十四年(三九七)
天草時貞を將として肥前國(長崎縣)島原の古城に據つた叛亂。
見參



龍 楓 立杜若 伊藤藤 井筒

供物を上げる時に用ひるものでありますが、徳富氏のお話に依りますと、氏の先祖の方が、天草の戦争の折に、敵の大將の首を取られ、之を首實檢に供する爲に、隅切折敷に載せて大將の見參に備へられた、それに因んで此の紋所を作られたと言ふ事で、巴は昔から、一つの頭、二つの頭などと呼んだもので、すから、之を敵將の首に擬へ、折敷に載せて、新しい紋所を組立てたといふ事は、いかにも武家にふさはしい話であります。かういふ種類の紋所は澤山あつて、例へば、

關ヶ原の合戦

慶長五年(三六〇)美濃國(岐阜縣)不破郡關ヶ原町で、石田三成等と徳川家康と天下を争つた戦役。
土佐 今の高知縣。
榎井 名は太兵衛、山内一豊の臣。
平塚爲廣 豊臣氏の臣、關ヶ原役に石田三成に與した。
源平屋島の戦 寛永四年(一八四)讃岐國(香川縣)屋島における源平兩軍の合戦。
那須與一 名は宗高、源義經の家來。



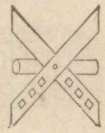
一幣 五本瑞籬 鳥居 鴨嘴祇園守 川久留子

關ヶ原の合戦に、土佐の榎井といふ士が、平塚爲廣といふ大將の首を取つた記念に、生首を紋にしたなどいふ事もありました。源平屋島の戦に那須與一が平家の扇を射落した、其の晴れやかな功名を偲ぶ爲に、其の子孫の中には、日の丸の扇を紋所に用ひて居るものがあるといふ事もあります。第三種は私が指示的紋章と名づけて居るもので、概して苗字に因んだものであります。例へば、吉野といふ苗字の者が櫻の花を紋所にし、堀井、酒井、駒井、井伊、澤井など

雲上明覽
皇室・皇族・公卿等の世系・氏族・紋所等を記述したものである。



子瓶一



木魚堅木干



字文無



字文有

いふ井の字の附く苗字の者が、井の字或は井桁、井筒などを用ひる類で、是等は其の紋所を見て、是が何家の紋所かといふ事が、すぐに指示されるやうに作られたものであります。近藤・遠藤・伊藤・佐藤・加藤・工藤・内藤といふ苗字の家が、比較的多く藤の紋所を用ひて居るのも、此の種類に屬します。藤の紋所については、藤原氏から出た家を用ひるといふやうな説もありますが、全くの誤で、それは雲上明覽といふ書物に據ると、藤原氏から出た公卿が總計九十七軒あつ

花山院家

御堂關白道長の孫、宇治關白師實の二男從一位左大臣家忠を祖とする、明治維新後、侯爵を授けられた。

今出川家

西園寺實兼の子兼季を祖とする、明治維新後、侯爵を授けられた。

久我家

村上天皇の皇子具平親王の子經房を祖とし、その孫雅實より久我氏を稱した、明治維新後、侯爵を授けられた。

て、その中藤の紋を用ひて居るものが僅か七家だけしかないのを見てもわかります。

第四種は尙美的紋章と言ふので、これは多くお公卿さんの家に用ひられました。お公卿さんには、家々によつて、衣裳や車などの裝飾に代々極つて用ひられた文様がありました。それを紋所にしたのがこれです。例へば、花山院家の杜若、或は今出川家の楓、久我家の龍膽の如きは、いづれも車や著物の文様として用ひられたものが、後世紋所が行はれるやうになつてから、其の方面に轉用されたものであります。是等の紋所は、もと單に美しいといふ好みによつて用ひ始め

戰國時代

後土御門天皇の文
明・長享・延徳・明
應から正親町天皇
の元龜・天正に至
る百餘年間

賤ヶ岳

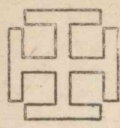
近江國(滋賀縣)伊
香郡

中川清秀

信長に仕へた武
將、天正十年(三四
三)戰死、年四十二

備前

今の岡山縣の一
部、
バテントルクルス



られたものであるから、尙美的紋章といふべきで、それ
は概して文様から移つて來たものでありました。
第五種は信仰の意味から用ひられたもの、即ち信仰
的紋章ともいふべきもので、是には随分澤山の種類が
あります。例へば、戰國時代にはキリスト教が盛に行
はれたので、此の教を信ずる者は、多く十字架を紋所と
致しました。その一例を挙げると、有名な賤ヶ岳の三
振太刀の一人、中川清秀は、當時の名高いキリスト教信
者でありました。それ故、その子孫は、今でも「中川クル
ス」と稱して、バテントルクルスといふものを用ひて居り
ます。備前の岡山、因幡の鳥取、この兩池田侯爵家は祇

アンドルユーの十
字架

アンドルユーはキ
リスト十二使徒の
一人、其の刑せら
れた十字架が×字
形であつたからこ
の形を紋にしら
へた。



島原の亂

天草の戦争と同
じ。

園守といふ紋所を用ひて居りますが、これはキリスト
教のアンドルユーの十字架から出たものであります。
御承知の如く島原の亂以來、キリスト教は嚴しい國禁
となつて、之を信ずるものは大名でも士でも、或は死刑
に處せられ、或は家祿を召上げられるといふ様なこと
になつて、此の教に關係のあるものは、片つ端からその
影を潛めました。が、それにもかゝらず、戰國時代にキ
リスト教を信じた大名の子孫は、大抵此の紋を用ひて
居りました。

信仰的紋章の中で、神様に關係のあるものは比較的
澤山あります。例へば鳥居、瑞籬、欄干、御幣、額、瓶子、千木、

仙石子爵

但馬國(兵庫縣)出石城主

趙州無字

天滿宮

菅原道真を祀る。

諏訪神社

信濃國(長野縣)諏訪郡、官幣中社。

八幡宮

八幡神(應神天皇)を祀つた神社、大抵は比賣神・息長帯姫をも配祀する。

出雲大社

島根縣鏡川郡大社町に鎮座する官幣大社、祭神は大國主神。

堅魚木など、苟も神社に關係のあるものは悉く紋所となつて居りますが、これを見てもさすがに日本は神の國だと思はれます。これに反して、佛教關係の紋所は多くありませんが、之は神道の現世的なるに反して、佛教が超現世的なるに基づくのでありませう。仙石子爵の紋所が「無」の字を用ひて居るのは、禪宗の「趙州無字」と言ふ故事から來たので、少い例の一つであります。我々の家に紋所があるやうに、神社にも亦社紋と言つて極つた紋所を用ひてゐるのがあります。例へば、天滿宮の梅鉢の紋、諏訪神社の梶葉の紋、八幡宮の巴の紋、出雲大社の龜甲に「有」の字の紋の如きがそれであり

出雲

今の島根縣の東半。

大國主尊

初代に出雲の主たりし神。

日本紋章學

沼田頼輔著、紋章に關して研究された大著、本課はその要旨を判り易くまとめたもの、大正十五年(二五六)三月刊行。

ます。出雲で「有」と言ふ字を用ひるのは、社傳に據ると、出雲では、祭神の大國主尊が杵築に鎮座せられたのが十月であつたといふので、此の月を鎮座月と申して居りますが、十月の二字を組み合はせると「有」の字になるので、それを神紋に定めたのであると申します。とにかく、我が國では、家にも神社にも定まつた紋章があつて、それに歴史的、精神的の重大な意義があるのでありますから、紋所の研究がその方面の關係の學問に取つて大切であるばかりでなく、之について一通りの知識と趣味とを持つことは、修養ある國民の一種の嗜ともいふべきであります。

(日本紋章學に據る)

徳富猪一郎
一四九頁参照

二〇 國史に返れ

徳富猪一郎

功課表

經典

平等觀

國史に返れ、日本國の歴史は大和民族の系圖なり。吾人祖先の功課表なり。日本帝國の寶庫なり。日本國民の經典なり。日本國を知るには、國史を通して知るより他に方便なし。國史は實に忠實なる案内者なり。信賴すべき指導者なり。

吾人は歴史的に考慮せざるべからず。平等觀よりすれば、すべての人類は皆同胞なり。されど、歴史觀よりすれば、すべての國は、皆特殊の性格を具ふ。甲國と乙國とは同じからず、乙國と丙國とは同じからず、而し

自主

把持す

て、丙國と甲國ともまた同じからず。十國あれば十箇の相違あり、百國あれば百箇の差異あり。この特殊の國性を維持することによりて、始めて獨立國の意義全うせらる。獨立國の本義は、形式的に他の干涉を絶ち、我が自主の體面を保つのみならず、精神的にも自主ならざるべからず。審にいへば、精神的に自國の國性を把持し、保存し、開展し、發達せしめざるべからず。

我が大和民族の誇は日本歴史なり。この歴史の中には、必ずしも悉く正しきこと、善きことのみあるにあらず。必ずしも悉く敬すべく、仰ぐべきことのみにあらず。人間は神にあらず。人間の所爲には種々の過

緩急に際す

割切に
五箇條の御誓文
明治元年(五三)三月十四日、明治天皇が紫宸殿で神々に誓はせられた新政府の方針五箇條。

失もあり、又罪惡もあり。されど、總括していへば、日本歴史は、決して大和民族の恥辱史にあらず、光榮史なり。いかに日本の皇室が、世界に比類なき有難き皇室なるかは、國史最も雄辯にこれを物語る。いかに日本の國民が、その一旦緩急に際して、護國の精神の猛烈に、かつ勇敢なりしかは、國史がその證人なり。いかに大和民族の中に、世界的偉人と比較して、一步も劣らぬもの、即ち彼自身また世界的偉人と稱するに足るものを生ぜしかは、長き年代の中に、屢接觸するところなり。即ち我が明治天皇の盛徳大業も、國史の背景によりて始めて明白に、精詳に、割切に、これを會得することを得。

帝國憲法
明治二十二年(五五)二月十一日發布

固陋頑冥
保守退嬰
詭激狂妄
赤化主義
架空浮誇
閑却す
守株す
己惚根性
醉生夢死す
國民小訓
徳富猪一郎著、皇室中心主義を説き示したもの、大正十四年(五五)二月刊行、和八年(五五)三月増補刊行。

國史の背景なきに於ては、五箇條の御誓文の如きも、ただ一種の雄快なる文書たるに止らん。帝國憲法の如きも、亦國史の背景なきに於ては、單に乾燥無味なる一部の法文に止らん。

凡そ、固陋頑冥の戀舊思想や、保守退嬰の島國根性や、若しくは、詭激狂妄なる赤化主義や、架空浮誇の摸倣精神や、いづれも我が國史を閑却したる爲といふを適當とす。現状を守株するも國史を知らぬが爲、現状に不安なるも國史を知らぬが爲、國民的自信力を失墜するも國史を知らぬが爲、己惚根性にて醉生夢死するも國史を知らぬが爲ならずや。

(國民小訓)

穂積重遠

東京市の人、民法
學者、法學博士、
男爵、東京帝國大
學教授、明治十六
年(五十四)生。

二 世界の日本

穂積重遠

我が國は今日に於て既に世界の日本であつて、日本だけの日本ではない。我々日本人は、たゞ日本國內の人としてだけ自分達を考へずに、世界に於ける日本人だといふことをもつと強く考へるべきである。我が國は東洋の盟主たるべきだといふ人がある。これも結構である。先づ以て我が國が東洋全體の平和を確立することは結構であるが、しかし我が國は東洋の盟主だけで終るべきではない。我が國があるが故に世界が平和、我が國があるが故に人類が幸福、かういふ事にな

盟主

近松門左衛門

六三頁参照

國姓爺合戦

日本へ通れた明の
遣臣鄭芝龍の子和
藤内が義姉錦祥女
の夫甘輝と協力し
て薩軍を破り、
明朝を再興すると
いふ筋の劇

大規模
宣揚

つて始めて我が國建國の精神を貫ぬくのである。我が國の根本精神は平和である。我が國は戦争に強い國であるけれども、その戦争は戦はんが爲の戦争ではなく、平和に到達せんが爲の戦争であつたのである。ごく卑近な例を引くが、近松門左衛門の有名な國姓爺合戦の中に、日本は大きに和ぐ大和の國といつてある。この劇は、非常に大規模な作で、日支兩國を舞臺として、我が國は偉い國だといふことを宣揚してあるが、その中に我が國を評して、日本は大きに和ぐ大和の國といつてあるのである。なぜ大和と書いて大和と讀むことになつたか、その邊の經過は分からないが、大き

に和ぐ」といふ事が我が國の一名になつてをるのは面白い。即ち、我が國は世界に平和を持來す國でなければならぬ。今日は我が國內に於ても、世界全體としても、動もすれば平和が脅される事があるけれども、人類の終局は平和でなければならぬ。その平和の中心はどうか我が國であつてほしいと思ふ。

日本人は愛國心が強い。けれども、愛國心と國際心とは決して矛盾すべきものではなく、最も大なる愛國者は最も大なる平和主義者であるといつてよいと思ふ。本當に我が國を愛するなら、たとゝ外國と争つて外國を打負かすことだけを考へるべきではない。事の

矛盾する

筋道によつては或は戦争をするかも知れないが、結局の問題としては、我が國が世界全體を平和に導くことが、我が國の世界に對する務である。それ故、我が國を愛する心と、世界の平和を願ふ心とは、決して矛盾するものでない。さうして、世界平和を確保する爲に、我々は先づ國家の權威を打立てなければならぬ。

我が國は、武力に於ても、産業上の力に於ても、又人民の人格、知識等に於ても、世界のどの國にも一步も譲らぬ、他の國が恐れ憚るやうなものでなければならぬ。が、かやうに國家の權威を打立てると同時に、我が國はもつとく國際的信用を得なければならぬ。我が國

認識不足

はまだ國際的信用を十分に得て居らぬ。それは恐らく諸外國の認識不足によるであらう。併し、どちらが善いか悪いかは別として、ともかく現在我が國は本當に世界中の信用を得て居る譯ではないから、更に一層國際的信用といふことを考へなければならぬ。國家として本當に公明正大で、正しい事は主張するが、間違つた事は直ちに改めるといふ態度でなければならぬ。國家と雖も間違つた事をする場合があるが、間違ひを蔽ひ隠すために他と争ふことは、大いに戒むべきである。論語にかういふ意味の言葉がある。君子でも過をする。しかし、君子の過は小人の過と違ふ。「君子

論語に

論語二十篇、孔子及びその門人の言行を輯録した書物、四書の一、本文の引用は子張篇からである。

日月の食

ノ過ヤ日月ノ食ノ如シ。」丁度太陽や月が缺けるやうなもので、太陽や月にも日蝕月蝕がある。併し、公明正大に皆の見て居る前で缺ける。「過ツヤ人皆コレヲ見ル。」あれ、日蝕だ、月蝕だと皆が指さす。けれども、やがて日蝕、月蝕が済むと、太陽や月は前よりも更に赫々たる光を放つので、更ムルヤ人皆之ヲ仰グ。」といふのである。國家に若し過があれば、即ち日月の蝕の如しで、それを直ちに改めることによつて、却つて國際的信用を増し、尙更國威が耀くことにもなるのである。我が國も、一方に於て日本は強い國だ、盛な國だと恐れられると同時に、他方に於て日本は善い國だ、正しい國だと信

用されるやうでなければ、本當でないと思ふ。
かういふ事を考へると、我が國の前途はまだなかなか多難であるが、併し、我々はこの際に十分な覺悟を以て、世界全體を相手に行かなければならないと思ふ。國際間の信用を得る爲には、氣が大きくなければならぬ。外國にかういふ事があつた、あゝいふ事があつたといつて、すぐに激昂するやうでは本當でない。氣を廣く持つて、向かふの立場にもなつて考へてみて、十分向かふの氣持も察し、思ひやりもあつて、善意を以て外國に接することが大事である。これは國家だけでなく、個人でもさうである。こちらの立場ばかり主

激昂する

張せず、思ひやりを以て、向かふの立場になつて考へてみて、向かふの言ふ事を出来る限り善意に解釋することが、個人としても大切である。どうかすると寛容と善意との爲に、人に瞞されて損をすることもある。併し、瞞されて損をしても、こちらが悪いのでなく、向かふが悪いのであるから、何の恥ぢることもない。君子と雖も道を以てすれば欺かれるのであるから、欺かれないうやうに用心することも大切であるが、人を見たら泥坊と思へ。といふやうでは、又非常に不愉快な話である。要するに、相手の爲を思ふことは、國家としても個人としても大切である。さういふ氣持を以て相互關係を

君子云々
君子ハ欺クニ其ノ
方ヲ以テスベシ。
(孟子)

國際聯盟脫退

昭和八年(二五)三月二十七日

好轉する

良い方へ向けて行かなければならぬ。我が國の今日の國際關係は、國際聯盟脫退以來餘り面白くない。また我が國の産業が海外に進出した爲に、外國は我が國に對して警戒して居る。この國際關係を好轉することとはなかなかむづかしいが、辛抱強く漸次に改善して行かなければならぬ。

(日本の過去現在及び將來)

日本の過去現在及び將來

穂積重遠著、昭和九年(二五)八月平壤夏季大學に於ける日本の過去現在及び將來に就いての講演、昭和十一年五月刊行。

女子新國語讀本 新制版 卷二 終

國語假名遣表

わ・は

語の上でわ・はは互に紛れない。語の中と下とで紛れる。左の外ははと書く。

- あわ(泡・沫)
- みなわ(水沫)
- あわつ(周章)
- あわただし(倉皇)
- いひわけ(言分)
- のわけ(野分)
- おひわけ(追分)
- うらわ(浦回)
- しまわ(島回)
- かわく(乾・渴)
- くつわ(轡)
- はにわ(埴輪)
- くわわ(慈姑)
- ことわざ(諺)
- しわざ(爲業)

ことわる(斷・理)

- こわいろ(聲色)
- こわだか(聲高)
- こわね(聲音)
- さわぐ(騒)
- さわやか(爽)
- しわ(皺)
- しわし(吝)
- すわる(坐)
- たわし(東葉子)
- たわむ(撓)
- たわむに(撓)
- たわやか(嬋妍)
- たわやめ(手弱女)
- たわら(俵)
- はらわた(腸)
- ひわ(鵝)
- ゆわう(硫黄)
- よわし(弱)

かよわし(弱)

あ・い・ひ

語の上ではあ・い・ひが互に紛れ、語の中と下とではあ・い・ひが互に紛れる。左の語の外はひと書く。

- あ(井)
- あげた(井桁)
- あど(井戸)
- あぜき(井堰)
- あな(田舎)
- あ(居)
- あざり(膝行)
- かも(鴨居)
- しき(闕)
- くも(雲居)
- くら(位)
- しば(芝居)
- とり(鳥居)
- まど(團樂)

もと(基)

あ(猪・亥)

あ(こ(豕))

いぬ(乾)

あ(胃)

あ(率)

ひき(率)

あ(藍)

くれ(紅)

あ(紫陽花)

くわ(慈姑)

ま(参)

お(老)

む(悔)

む(報)

え・ゑ・へ

語の上ではえ・ゑが互に紛れ、語の中・下ではえ・ゑ・へが互に紛れる。左の語の外はへと書く

糸(繪)
 糸がく(畫がく)
 糸のぐ(繪具)
 糸かき(畫工)
 とも糸(鞆繪・巴)
 糸(餌)
 糸匠し(烏帽子)
 糸む(笑)
 糸がほ(笑顔)
 糸く匠(匠)
 糸つ匠(笑壺)
 糸じ(衛士)
 糸ふ(酔ふ)
 糸ひどれ(醉客)
 こ糸(聲)
 つ糸(杖)
 つく糸(机)
 ゆ糸(故)
 十糸(据)
 十糸ぶろ(据風呂)
 いしす糸(礎)
 十糸(末)

十糸ひろ(末廣)
 こす糸(木末・梢)
 う糸(飢・餓)
 う糸(植)
 う糸(植)
 う糸(植木)
 う糸こみ(前栽)
 ち糸(智慧)
 え(兄)
 えと(兄弟)
 きのえ(甲)
 ひのえ(丙)
 つちのえ(戊)
 かのえ(庚)
 みづのえ(壬)
 え(枝)
 えだ(枝)
 しづえ(下枝)
 え(江)
 いりえ(入江)
 ふえ(笛)
 さざえ(螺螺)
 はえ(映)

ゆふばえ(夕映)
 もえ(萌)
 もえ(萌黃)
 みえ(外見)
 はえ(生)
 ひこばえ(藥)
 いえ(癒)
 あまえ(甘)
 おびえ(脅)
 おぼえ(覺)
 きえ(消)
 きこえ(聞)
 こえ(越)
 こえ(肥)
 こごえ(凍)
 さえ(冴)
 たえ(絶)
 ひえ(冷)
 ふえ(殖)
 ほえ(吠・吼)
 もえ(燃)
 もだえ(悶)

を・お・ほ・ふ
 語の上ではを・おが互に紛れ、語の下中ではほ・まが紛れる。おは語の中下に用ひることはない。左の語の外は語の上ではお、中と下とはほと書く。

を(男・雄・夫・牝)
 をつと(夫)
 をとこ(男)
 めをと(夫婦)
 たけを(猛夫)
 ますらを(丈夫)
 をひ(甥・姪)
 ををし(雄雄)
 を(小)
 をとめ(少女)
 をぢ(伯父・叔父)
 をば(伯母・叔母)
 を(女)
 をみなへし(女郎花)

を(尾)
 をばな(尾花)
 を(緒)
 はなを(鼻緒)
 を(麻・苧)
 をけ(桶)
 をさ(笈)
 をか(岡・丘・陸)
 をか匠(陸稻)
 をがむ(拜)
 をかし(可笑)
 をかす(犯)
 をぎ(荻)
 をこ(痴・愚)
 をこがまし(痴)
 をさ(長)
 をさなし(幼)
 をさむ(治・修・收藏納)
 をさまさ(大抵)
 をしどり(鷺鷥)
 をしふ(教)
 をしむ(惜)

をす(食・治)
 をち(遠)
 をちこち(遠近)
 をととひ(一昨日)
 をととし(一昨年)
 をとり(囚・媒鳥)
 をどる(踊・跳・躍)
 をの(斧)
 をのく(慄)
 をはる(終・卒・了)
 をり(檻)
 をり(節)
 をり(居)
 をる(折)
 をしき(折敷)
 しざる(萎)
 しをり(葉)
 つづらをり(九十九折)
 をらち(大蛇)
 あを(青)
 あをがひ(螺鈿・青貝)
 あまし・あまむ(青)

いさをいさをし(功績)
 うを(魚)
 かつを(鯉)
 ひを(氷魚)
 しらうを(白魚)
 かざる(香薰)
 さを(竿・棹)
 しをん(紫菀)
 しをらし(可憐)
 しをる(萎)
 たをやか(婢妍)
 たをやめ(手弱女)
 とを(十)
 ばせを(芭蕉)
 まをす(申)
 みさを(操)
 みを(滯・水脈)
 みをつくし(滯標)
 やをら(徐)

あふひ(葵)
 あふぐ(仰)
 あふぐ(煽)
 あふぎ(扇)
 あふる(煽)
 あふみ(近江)
 とほたふみ(遠江)
 きのふ(昨日)
 けふ(今日)
 さふらふ(候)
 たふる(仆・倒)
 たふとし(貴)
 はふる(投)
 ふくろふ(鼻)

じ・ぢ
 じぢは語の上・中・下どこにあつてもじに紛れる。左の語の外はじと書く。

ち(父)
 をち(伯父・叔父・小父)
 ちぢ(爺・祖父)

姬姻姿威娘娛媚婚婦
婚媒嫁嫡孀
【子】子字存孝季孤孫學
【宅】宅守安宏完宗官定
宜客宜室官害宴家容宿
寄密富寒察寢寢寢寫寬
寶
【寸】寸寺封射將專尉尊
尋對導
【小】小少尙
【尤】就
【尸】尺尼尾尿局居屈屈
屋展層履屬
【山】山岡岩岳岸峙峯島
峽崇崎崩
【川】川州巡巢
【工】工左巧巨差
【己】己

【巾】市布帆希帝帥師席
帳帶常帽幅幕幣
【干】干平年幸幹
【幻】幻幼幾
【床】床序底店府度座庫
庭庶康廉廓廢廣廳
【延】延廷建廻
【弄】弄弊
【弋】弋式
【弓】弓弔引弟弱張強彈
【形】形彩彫影彰
【役】役彼往征待律後徐
徑徒得從御復徵徵德徹
【心】心必忌忍志忘忙忠
快念怒思怠急性怨怪怯
恐恥恨恩恭息悔悟悖患
悲惟悼情感惜惠惡惰惱
想愁愉意愚愛感慈慕慕

慘慢慎憤慨慮慰慶慾憂
憐憚憲憶憾憤懇應懲懷
懸戀
【戈】成我戒戰戲戴
【戶】戶戾房所扇
【手】手才打扱扶批承技
抑投抗折抱抵押披抽拂
拍拒拓拔拘拙招拜括拳
拾持指振捕捧描拾掃授
掌排掛採探控推揚接提
換握揮搗揮援損搖搜擴
携摩撫揮擊操擄據擬擴
攝
【支】支
【改】改改攻放政故敍敎
敏救敗敢散敬敵數數整
【文】文
【斗】斗料斜

【斤】斤斤斬新斷斯
【方】方施旋族族旗
【无】既
【日】日且旨早旬旭昇昌
明易昔星春昭昨是映時
晚畫普景晴晶智暇暖暗
暑暮暴曆曇曜
【曲】曲更書曹會替最會
【月】月有朋服朕朗望朝
期
【木】木未末本札朱机朽
杉材村束柿杯東松板枕
林杲果枝枯架柄某染柔
查柩柱柳栗校株根格栽
桃棠桐桑梅條梨棗棗棗
棒棟森棺植楠業極榮構
概樂樓標樞模樣樹橋機
橫檄檢櫻欄權

【欠】欠欲款歌歌歌歌歌
【止】止正此步武歲歷歸
【歹】歹死殊殉殖殘
【段】段殺殿毀
【母】母每毒
【比】比
【毛】毛
【氏】氏民
【氣】氣
【水】水冰永汁求汗汚江
池決汽沈淩沖沙汰河沸
油治沼沿況泉泊法波泣
泥注泰泳洋洗津洪活派
流浦浪浮浴海浸消涉液
淑淚淡淨淫深混清淺添
減淵渡溫測港渴湖湧湯
源準溢溶溺滅滋滑滯滴
滿漁漂漆漏演漕漠漢漫

漸潔潛湖澤激濁濃濕濟
瀆瀆瀆
【火】火灰災炊炎炭烈無
然煉煮煙照煩熱熱燃燈
燒營爆爐
【爪】爪爭爲爵
【父】父
【爻】兩
【片】片版牌
【牙】牙
【牛】牛牧物牲特犧
【犬】犬犯狀狂狩狹猛貓
猶獄獨獲獵獻
【玄】玄率
【玉】玉王玩珍珠班現球
理翠環璽
【瓦】瓦瓶
【甘】甘甚

【生】生產甥
【用】用
【田】田由甲申男町界畏
畑畝畝畝畝畝畝畝畝
【疋】疋疎疑
療癖
【登】登發
【白】白百的皆皇
【皮】皮
【皿】皿盆益盛盜盟盡監
盤
【目】目盲直相省眉看眞
眠眼着睡督
【矢】矢知短
【石】石砂砲破研硬硯碁
碎碑確磁磨礎
【示】示社祈祕祖祝神票

祭禁禍福禦禮
【禾】禾私秋科秒租秧移
稅程稚種稱稻稿穀積穗
稔
【穴】穴究空突窈窕窳窳
窳
【立】立章童端竅
【竹】竹竿笑笛符第筆等
筋筒答策算管箱節節筴
篤簡簿籍
【米】米粉粒粘粗粹精糖
糞
【糸】糸紀約紅紋納純紙
級紛素紡束紫累細紳紹
紺終組結絕絡給統絲絹
經綠維網綉綉綉綉綉綉
線縵縵縵縵縵縵縵縵縵
縮縱總縵縵縵縵縵縵縵
縵縵

【舌】舌合	【目】與興舉舊	【至】至致臺	【自】自臭	【臣】臣臥臨	【肉】肉肖肝股肥肩育肺 胃背胎胞胸能脅脈脊 脚脫腕腕腦腰腸腹膚膜 膝臆臆臆臆	【肅】肅肇	【耳】耳聖聞聯聲職聽	【耒】耒耕	【而】耐	【老】老考者	【羽】羽翁翬習翼	【羊】羊美羣義	【網】罪置署罰罵罷羅	【缶】缺																			
【舟】舟航般舵船舶艦	【良】良	【色】色	【艸】芝花芽芳苑苗若苦 英茂茶草荒荷莊菊茵菓 荼華萬落葉著葬蒙蒸蓄 蔓薄藏藝藤藥	【虎】虎虐處虛號	【虫】蚊蛇蛙蜂蜜融蟲蠶	【血】血衆	【行】行術街衙衛	【衣】衣表袞袋袖被裁裂 褻裕補裝裸製複褒襲	【西】西要覆	【見】見規視親覺覽觀	【角】角解觸	【舞】舞	【言】言訂計討訓託記詔 訪設許訴診詐詔評詞詠 試詩詰話詳誇誌認誓誕 誘語誠誤說課調談詩論 諭諸諾謀謁諮講謝諂謹 謬證識譜警譯議護譽讀 變讓	【車】車軌軒軟軸較載 輕輦輪鞞輪輿轉																			
【馬】馬馳駁馱駐騎騰駮 驅驗驚驛	【骨】骨髓體	【高】高	【門】闕	【鬼】鬼魂魔	【魚】魚鮮鯉鯛	【鳥】鳥鳩鳴鶴鷄	【齒】齒齡	【龍】龍	【龜】龜	【鹿】鹿隱	【豕】豕象豪豫	【貝】貝貞負財貧貨販貫 責貯貳貴買貸費買賀貨 賄資賤賓賜賞賢賣賤賦 質賴購贈贊	【赤】赤	【走】走赴起超越趣	【足】足距跡路踊躍	【身】身	【辛】辛辨辭辯	【辰】辰農	【是】是迎近返迫迭迷 追退迭逆透逐途通速 造連週進逸遂遇遊運過 道達達遙遞遠遣適遭遲 遷選選避還邊邊 【邑】邦邪邱郊郎郡部郵 都鄉	【酉】酌配酒酢酬酷酸醉 醜醫	【采】釋	【里】里重野量	【金】金釜針鈞鈍鈴鉛鉢 銀銃銅銘銳鋒鋼錯錄錢 鍋鎖鎮鏡鑄鐘鐵鑑鐵	【麥】麥	【麻】麻	【黃】黃	【黑】黑默點黨	【鼓】鼓	【鼻】鼻	【齊】齋	【齒】齒齡	【龍】龍	【龜】龜

【長】長	【門】門閉開閑問閑關	【阜】防附降限陞院障除 陪陳陰陵陶陷陸陽隆隊 階隔隙際障隣隨險隱	【佳】隻雀雄雅集雇雌雙 雜離難	【雨】雨雪雲零雷電霈震 霜霧露靈	【青】青靜	【非】非	【面】面	【革】革靴	【音】音響	【頁】頁項順頤預頤領頭 頻題頰頰頤頤頰頰頰	【風】風	【飛】飛飄	【食】食飢飲飯飾養餓餘 餅館餐	【首】首	【香】香	【馬】馬馳駁馱駐騎騰駮 驅驗驚驛	【骨】骨髓體	【高】高	【門】闕	【鬼】鬼魂魔	【魚】魚鮮鯉鯛	【鳥】鳥鳩鳴鶴鷄	【齒】齒齡	【龍】龍	【龜】龜	【鹿】鹿隱	【麥】麥	【麻】麻	【黃】黃	【黑】黑默點黨	【鼓】鼓	【鼻】鼻	【齊】齋	【齒】齒齡	【龍】龍	【龜】龜
------	------------	--	--------------------	---------------------	-------	------	------	-------	-------	--------------------------	------	-------	--------------------	------	------	---------------------	--------	------	------	--------	---------	----------	-------	------	------	-------	------	------	------	---------	------	------	------	-------	------	------

注意

- (一) 本表にない漢字は假名で書くこと
- (二) 固有名詞には本表にない文字を用ひても差支ない、ただし外國(支那を除く)の人名地名は假名書とすること
- (三) 代名詞・副詞・接續詞・感動詞・助動詞および助詞はなるべく假名で書くこと
- (四) 外來語は假名で書くこと。

略字表

(臨時國語調査會發表)

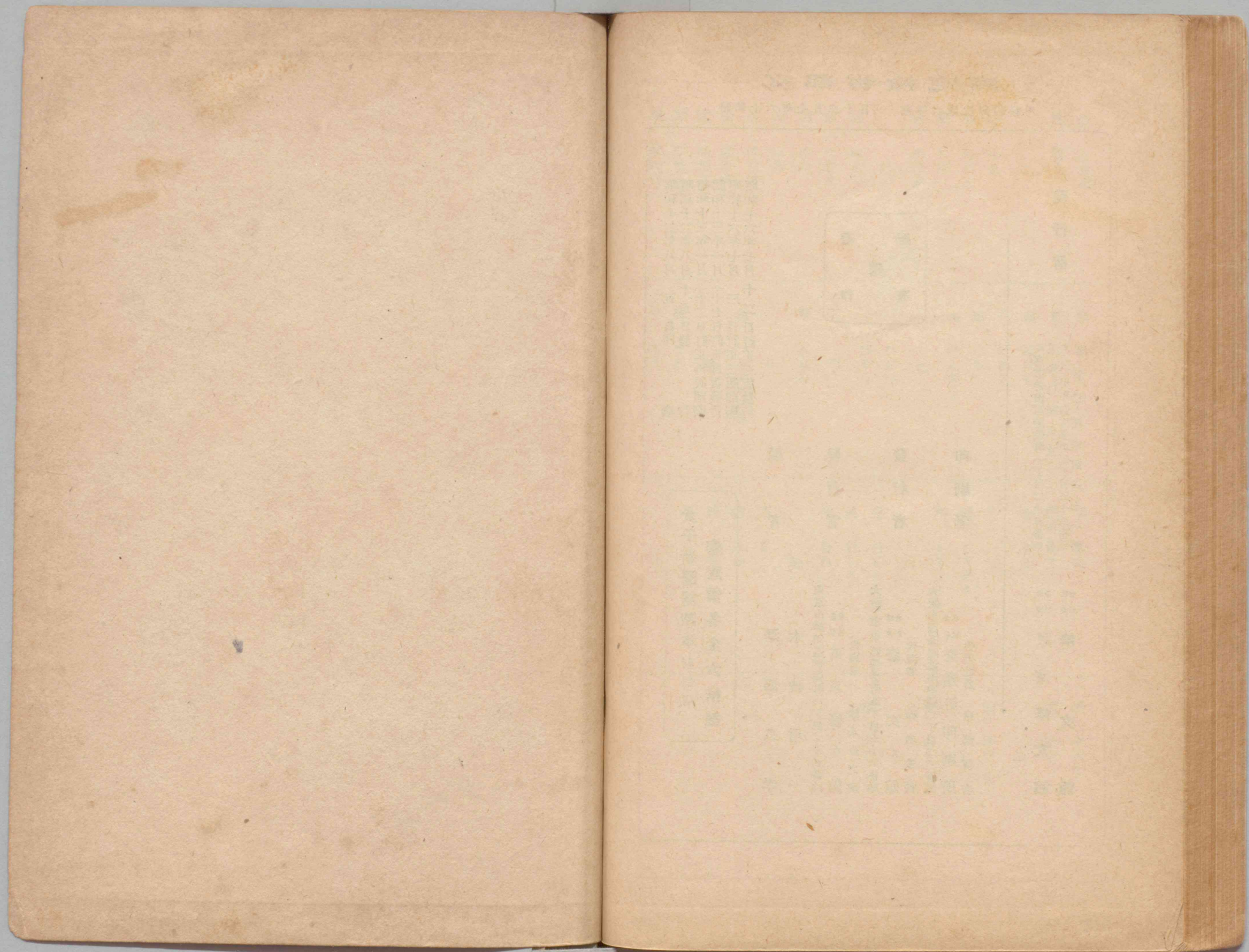
左の字體を本位として用ひること。
(括弧内の小字は字典體)

勸(勸) 権(權) 灌(灌) 飲(飲) 觀(觀)
 沢(澤) 扱(擇) 訳(譯) 馱(驛) 釈(釋)
 変(變) 恋(戀) 蛮(蠻) 湾(灣)
 莖(莖) 徑(徑) 経(經) 軽(輕)
 併(併) 塀(塀) 瓶(瓶) 餅(餅) 研(研)
 齊(齊) 斎(齋) 濟(濟) 劑(劑)
 残(殘) 浅(淺) 賤(賤) 錢(錢)
 勞(勞) 嘗(嘗) 榮(榮) 学(學) 覺(覺)

举(舉) 眷(眷) 斷(斷) 繼(繼)
 齒(齒) 齡(齡) 濕(濕) 頭(頭)
 窓(窓) 総(總) 属(屬) 囑(囑)
 為(爲) 偽(偽) 帶(帶) 滯(滯)
 参(參) 慘(慘) 兩(兩) 滿(滿)
 発(發) 癢(癢) 爪(鼠) 獵(獵)
 乱(亂) 辞(辭) 潜(潛) 贊(贊)
 支(走) 伎(徒) 位(從) 縱(縱)
 惱(惱) 腦(腦) 処(處) 拠(據)
 担(擔) 胆(膽) 未(來) 麦(麥)
 寿(壽) 鑄(鑄) 数(數) 楼(樓)

樂(樂) 菓(菓) 読(讀) 続(續)
 竜(龍) 滝(瀧) 随(隨) 髓(髓)
 廓(廓) 獮(獵) 聴(聽) 廳(廳)
 虚(虚) 戯(戲) 遅(遅) 解(解)
 独(獨) 触(觸) 疊(疊) 撰(撰)
 虫(蟲) 蚤(蚤) 仮(假) 兎(兎)
 励(勵) 嘗(嘗) 国(國) 田(田)
 円(圓) 凶(圖) 壺(壺) 実(實)
 写(寫) 宝(寶) 扣(控) 叙(叙)
 条(條) 様(様) 帰(歸) 气(氣)
 炉(爐) 儀(儀) 献(獻) 画(畫)

苗(苗) 尽(盡) 礼(禮) 称(稱)
 糸(絲) 欠(缺) 声(聲) 台(臺)
 旧(舊) 万(萬) 号(號) 証(證)
 豊(豊) 弁(辨) 通(遞) 辺(邊)
 医(醫) 鉄(鐵) 関(關) 双(雙)
 靈(靈) 余(餘) 館(館) 体(體)
 塩(鹽) 点(點) 覚(覺)
 鬮(鬮) 刺(刺) 亀(龜)



A
北

金口美代子

広島大学図書

2000302123

